十六世紀におけるパイ・イ語-漢語，漢語-パイ・イ語單語集の研究

西田　龍雄

〈一般にタイ諸語として一括される諸言語は，基本單語の大部分に關して，相互の對應關係が極めて明確である[1]。これまでに試みられたタイ諸語についての研究は，それらの對應關係が明瞭である基本單語にもとずいて，諸方言間の對應原則を設定するための比較言語學的な操作に重點がおかれてきた。そして，個々の言語群――たとえばシャム・ラオ語群，シャン語群などのより限定されたグループに屬する言語の歴史的な考察には，注目されることが少なかつた。しかし，いくつかの小語群についての歴史的な研究が，それ自體重要な對象であり，また，その結果が比較研究に對して，共通形式の設定に對して，大きい寄與をなすであろうことも，疑う余地がない。〉

華夷譯語――暹羅館・八百館・百夷館

§1.　タイ諸語に所屬する言語がたどつてきた言語形式の變遷を考察するにあたつて，我々はどのような資料を利用することができるか，また，利用しなければならないかについては，未だはつきりとわかつてはいない。しかし，過去における一定の時代の言語形式を再構成し，その音韻體系を考察する目的のためには，タイ諸語以外の言語による音表記をともなつた資料が，もつとも重要な役割を果すであろうことは云うまでもない。この種の資料として，まず第一に掲げなければならないのは，「華夷譯語」シリーズに含められる『暹羅館譯語』『八百館譯語』『百夷館譯語』という表題をもつた漢語とタイ語の對譯單語集である[2]。これらのテキストは，いずれも16世紀に中國において作成されたものであつて[3]，當時タイ諸語が分布した主要な地域[4]の言語の基本單語を記述した資料として，その價値は大きい。概略的に云うと，『暹羅館譯語』はシャム語を，『八百館譯語』はラオス（チエン・マイ）語を，

1）基礎語彙を中心にタイ諸語間の關係にふれた論著は少くない。最近李方桂教授がこの問題にたずさわつておられるようである。我々は同教授の "A Comparative dictionary of some twenty Tai languages and dialects" に多くの期持をかけたい。(cf. Fang-kuei Li, Classification by Vocabulary: Tai dialects. Anthropological Linguistics. Feb. 1959.)

2）この中，『八百館譯語』および『百夷館譯語』については，いわゆる雜字，來文全般にわたつた泉井久之助教授の研究がある。「八百館雜字ならびに來文の解讀」『京都大學文學部研究紀要』第 2. 1953,「東洋文庫本華夷譯語，百夷館雜字並に來文の解讀」『比較言語學研究』創元社，1949 所收。

『百夷館譯語』はシャン系統の言語，パイ・イ語を記載したものである。筆者は，タイ語の歴史的考察は，まずこの資料を對象としてはじめなければならないと考えている。これらの資料を詳細に吟味するならば，それぞれの小言語群の歴史のみにとどまらず，タイ諸語全般の歴史に關しても，もつとも基本的な種々の問題を提起し，その解決をも提供することになるであろう。

§2. 華夷譯語シリーズについては，これまでに諸先學によつて，數多くの勞作が發表されてきた[5]。しかし，その研究態度は一樣ではなかつた。筆者は，このテキストに對して，つぎのような態度で臨みたいと思う。

華夷譯語のような一定の年代における一定地域の言語を，一人の人乃至は數人の人が一定の原則にしたがつて記述した文献を扱う場合，このテキスト內部のみにその解明の鍵を求める方法は，最良に近い態度ではあるけれども，その手續のみでは，實際には，その言語の解明は成功しないであろうと思われる。その上，乙種本テキストを對象とするときには，そこに用いられている一定數の文字要素に一定數のローマ字音價を與えたのみでは，その綴字のローマ字轉寫にとどまつて，當該言語の解明にはならない。ほとんどの種類の華夷譯語（乙種本）に用いられている文字は，その傳承形乃至は同系統に屬する文字の現在にまで傳わる使用法から類推して，大した困難もなく讀むことができる。文字に對して，どのような轉寫法をとるかはもつとも根本的な問題ではないのである。我らはあくまでも，可能なかぎり，文字の組織と言語の體系との混同をさけねばならない。文字は，それによつて書きあらわされている言語を解明するための有力な手ずるではあるけれども，言語自體ではないからである[6]。もし，華夷譯語テキストのローマ字轉寫がすなわちその言語の音韻體系を代表すると考えるならば，重大な誤りを犯すことになつて，その資料のもつ本當の價値を正しく評價できなくなるであろう。たとえば『八百館譯語』と『暹羅館譯語』に記載された言語を解明するためには，八百文字あるいは暹羅文字によつて記載された單語をまずローマ字轉寫することからはじめなければならない。しかし，それのみにとどまるならば，現在まで傳承されているラオス文字やシ

---

3) この作成年代を確定することは實際にはむつかしい。また暹羅，八百，百夷の三譯館は共に同時に作られたわけではない。四譯館館則（京大復印本）によれば暹羅館は萬曆七年（1579），八百館は正德六年（1511），百夷館は，永樂五年(1407)に設立されたとある。三田村泰助「暹羅館譯語について」（立命館文學，2號，1952）には，暹羅譯語の成立について論じられている。

4) ここで主要地域といつたのは，明朝の行政面から見た意味であつて，言語學的な意味ではない。この三譯語に記載された言語の分布地域については，山本達郎教授の考證がある。「華夷譯語にみえたる百夷及び八百の文字——タイ族のアルファベットに關する一研究」——『東方學報』東京第六册。

5) 山崎忠：「我が國に於ける華夷譯語研究史」『朝鮮學報』第五輯，およびその續論（同學報六輯）には諸先學の業績が詳しく述べられている。

6) これについては，拙稿「Myazedi 碑文における中古ビルマ語の研究(1)」『古代學』4卷1號（1955）p. 19. fn. 1 を參照されたい。

ャム文字による正書法といくつかの點で差異が認められるに過ぎないであろう。勿論これらの差異が重要な意味をもち，言語形式の變遷を反映していることは事實ではあるけれども，當時においても正書法は，やはり傳統的な遺產であつて，それによつて表記されている實際の言語とは，今日のラオス語やシャム語と類似した關係にあつた可能性が多い。しかし，八百文字，暹羅文字をローマ字轉寫する手續のみにとどまらずに，當時の漢人が彼等の母國語がもつ音韻體系にもとずいて弁別し，付與した漢字音から，八百語，暹羅語の音韻體系を再構成するならば，いくつかの重要な事實を發見することができる。その一例をあげよう。現在話されている狹義のタイ言語では，それらの共通音素として假定される有聲破裂音に，無聲無氣音または無聲出氣音のいずれかゞ對應していることはよく知られた事實である。しかし，この有聲破裂音が無聲音化したのは何時頃のことであつたかについては，これまで考察されたことがなかつた。それにも拘らず，これは重要な問題である。勿論，この變化が生じた時期を決定することはむつかしいけれども，この2種の『譯語』を吟味するならば，つぎのような結論を得ることができる。シャム語は16世紀以前にすでに無聲音化を完了していたが，ラオス語は，16世紀には，なお，音節初頭に有聲無氣破裂音 g-.d-.b-.ǰ- を保存していた。しかし，gr-, br- の -r- を副次音素とする子音結合は，すでに k'ɽ-, p'ɽ- あるいは k'-, p'- の無聲出氣音にかわつていた。この推定には，つぎの興味のある根據がある[7]。『八百館譯語』において，八百文字，k-t-p-c- を用いて書かれた單語には，漢語の無聲無氣音 k-, t-, p-, tṣ- があてられている[8]。たとえば，kai 盖「kai」〈雞〉(245)，tāŋ 定「tiŋ」〈瓜〉(177)，pan 伴「pan」〈麻〉(186)，cai 寨「tṣai」〈心〉(524) など。この原則は一貫されているために，八百文字 k-t-p-c- をもつて書かれたラオス語は，無聲無氣音 k-t-p-tṣ- であつたと認めることには問題がない。同種の根據から，八百文字 kh-th-ph-ch- をもつて書かれた八百語音は無聲出氣音 k'. t'. p'. tṣ'. であつたと云うことができる。khā 苛「k'ɔ」〈奴隷〉(361)—「k'aa」，thām 炭「t'an」〈問う〉(418)—「t'aam」，phā 怕「p'a」〈岩崖〉(97)—「p'aa」，khau chā 粹察「tṣ'a」—「tṣ'aa」〈麥〉(229) など。この2系列に對して，八百文字 g-, d-, b-, ǰ- を用いて書かれた八百語には，期待されるように漢語の無聲出氣音があてられてはいない。無聲無氣音 k-, t-, p-, tṣ- があてられている。 gā bāŋ 戛丙「ka piŋ」〈高價な〉(690)，dāŋ 黨「taŋ」〈道〉(75)，bɔ 播「pɔ」〈父〉(367)，ǰaŋ 掌「tṣaŋ」〈憎む〉(421) など。これらの g-, d-, b-, ǰ- はそれぞれ共通タイ語形* g-, d-, b-, ǰ- に對應する。すなわち八百語はつぎの關係にたつている。

---

7) 以下，八百館譯語および百夷館譯語から引用する單語に付した番號は，上掲泉井教授の二論文の語彙番號にしたがつている。ただし，百夷館譯語については，そのローマ字轉寫法の一部を，筆者の立場にしたがつて改變した。

8) 以下，當時の漢語すなわち明末順天音を代表するものとして，徐孝の『重訂司馬溫公等韻圖經』を利用する。陸志韋「記徐孝重訂司馬溫公等韻圖經」（燕京學報, 32期, 1947）にしたがう。ただし印刷の都合上表記法の一部のみ改めた。

共通タイ語	k	kh	g	t	th	d	
八百文字	k	kh	g	t	th	d	
漢語表記	k	k‘	k	t	t‘	t	など。

この事實から，一應我々は，八百語では，g-, d-, b-, ǰ- が，無聲無氣音化していて，トネームの差異を考慮しないならば，k-, kh-, g-, t-, th-, d- などの對立が，k-: k‘-, t-: t‘- の無聲無氣音對無聲出氣音の對立にかわつていたと假定することが可能である。換言すると，八百語がいわゆる北方タイ語系に屬する言語であつたと假定することができる。また，この假定を援ける別の事實も見出される。それは，八百文字 B, D によつて書かれた八百語の一部には，漢語の m- および n-, l- があてられている單語があることである。たとえば〈星〉Dāw 閘「nau」(8)，〈刀〉DaD 臘「la」〈刀〉(500)，〈赤い〉Dāŋ 領「liŋ」(639)；〈村〉Bān 蠻「man」(86)，〈無い〉Bau mī 冒米「mau」(446) など。

しかし，筆者はつぎの諸點から，この假定を支持したくはない。1) 當時の漢語には，無聲無氣音と無聲出氣音の對立のみがあつて，有聲音の系列は存在しなかつた。したがつて，漢語の無聲無氣音をあてる對象は，八百語が無聲無氣音であつた場合のほかに，有聲無氣音であつた場合も同程度の可能性をもつている。2) この言語を傳承していると考えられる現代チエン・マイ・ラスオ語[9] では g-, d-, b-, ǰ- ははつきりと無聲出氣音にかわつている。3) つぎの諸例に認められるように，八百語では，-r- を副次要素とする文字結合 gr-, br- には，漢語の無聲出氣音があてられている。 gröŋ 擎「k‘iŋ」〈はかり〉(344)， grai ḥrow 開「k‘ai」路〈笑う〉(432)，gru’ 苦「k‘u」〈跪く〉(435)，grān 堪「k‘an」〈懶惰な〉(463)，ɣon brān plā 混盤「p‘an」垻〈漁師〉(363)，phū brɔ̄ŋ 僕翁「p‘uŋ」〈媒酌人〉(386)，brɔ̄m kan 盤幹〈聚める〉(451). brāk kan 机「p‘a」幹〈離れる〉(453). これらの初頭音の大部分は，共通タイ語 gr-, br- に對應するから，八百語には，gr->k‘ɣ-, br->p‘ɣ- の變化があつたことになる。4) 八百文字 B, D の一部に，漢語 m-, n-, l- があてられる現象は，『暹羅館譯語』にも認められる。B, D によつて表記された八百語音は，ʔb, ʔd 乃至は m̥b̥-, n̥d̥- であつた可能がこれと關連して考えられる。

以上の諸點から，漢語 p, t, k, tʂ をもつて表記された八百語音は，實は有聲無氣音 g, d, b, ǰ であつたと解釋したい。その上，この有聲音が無聲音化しはじめたのは，まず子音結合からであつたことが，同時にこのテキストから明らかにされ得るであろう。おそらくこれは，-r- の無聲音化あるいは消失と關連した現象であつたと考えられる。一方，『暹羅館譯語』は，これとは異つた性格をしめしている。このテキストでは，暹羅文字 g, d, b, ǰ には，漢語の無聲出氣音 k‘, t‘, p‘, tʂ‘ があてられて，暹羅文字 kh, th, ph, ch を用いて書かれた暹羅語とは，差別されていな

9) この言語がチエン・マイ・ラオ語であることは，八百館雜字の中，mööŋ byɔŋ jyɔŋ hmai〈八百〉とあり (110)，來文各處に jyɔŋ hmai が漢語‘八百’にあたつていることからわかる。(cf. 泉井，上揭 1953, p. 2，山本達郎，上揭論文 p. 768).

い。khaaw 考「k'au」〈白い〉, gau lop 考祿〈文書〉, khaay 楷「k'ai」〈賣る〉, gai 開「k'ai」〈誰〉, thaam 毯「t'an」〈問う〉, daan 彈「t'an」〈彼〉, phii 否「p'i」〈靈魂〉, bii 痞「p'i」〈肥える〉, chak 察「tṣ'a」〈曲尺〉, ǰaa 茶「tṣ'a」〈茶〉 など。したがつて，暹羅語では，この2系列は差別がなく，現代シャム語と同樣に k:k'; t:t'; p:p'; tṣ:tṣ' の對立のみがあつたと考えられる。

このような重大な事實は，單に當該文字をローマ字をもつて置き替えただけでは發見されないであろう。

§3. 我々は，文字とは別に，その文字によつて表記されている言語の音韻體系をさぐるためには，上に述べたごとく，そこに付與されている漢語による音表記により大きい重點をおかねばならない。この華夷譯語が作成された意圖の大きい點もやはりこの點にあつたと考えられる。しかし，云うまでもなく，塞外諸言語の音韻體系と漢語の音韻體系とは嚴密には並行することがないために，漢語による音表記にもとずいて，當該言語の音韻體系を推定するためには，各言語の性格に應じていくつかの基本的假定が必要である。たとえば『A館譯語』を對象とするときに，その親近言語乃至それを傳承する言語の構造から考えて，このテキストが記載された時代には，有聲軟口蓋鼻音が存在したことが明確であるとか，l 音と r 音が意味の差別をになつていたにちがいないとか，長母音と短母音が弁別されていたに相違ないとか，という點が明らかにされるならば，漢語による音表記では，それらの差別を認めることができないにしても，テキスト以外の根據から，當該言語にそれらの差別を認めるべきであると思う。この基本的な假定の決定を助けるのは，一つには當該言語の文字組織でもある。たとえば，百夷語 A (cf. §7.) では r- および l- は漢語表記上では，ともに l- を用いて區別されていない。この事實から，百夷語 A でこの2音が弁別的な單位ではなかつたと斷定するのは早計である。これは區別されなかつたのではなくて，區別できなかつたのである。この2音の對立は，ほかのタイ諸語一般においても保持されており（ときに h:l，あるいは ɬ:l の對立にかわるけれども），百夷文字でははつきり書き分けられているために（ときに混同されてはいるが），百夷語Aには，r- と l- の對立した2音素があつたことを認めるべきであろう。

§4. 我々はつぎの原則を重じなければならない。譯語の漢字表記はかなりの一貫性をもつている。たとえば百夷語Aでは〈頭〉を意味する形式はつねに'戶'によつて表記されており，〈心〉には，つねに'遮'があてられる。これらは決して綴字面の機械的な置き換えではなかつた。その單語の實際の發音を表記したものと考えられる。もしも機械的な置き換えであるならば，〈頭〉ro には'羅'を〈心〉cau には'招'をあてているはずである。（cf. -lo 羅〈ばつた〉(201), cau 招〈早い〉(91)）したがつて，當該言語の AB 形式を表記するために，漢語の A'B' 形式を用いるのがもつとも妥當であると考えられるときに（たとえばA語の kaŋ に對して漢語の kaŋ を用いる），また實際にそのように用いられているときに，もし當該言語の他の意義をもつた AB 形式に，漢語の A'D' 形式乃至は C'B' 形式があて

られているならば，特殊な條件がない限り，後者の形式は，文字面ではABと書かれてはいるけれども，實際には，A′D′, C′B′ に近い形式をもつていたと解釋されなければならない。たとえば百夷語Aでは，百夷文字 phuŋ をもつて書かれている形式に對して，漢語の朋「p'uŋ」(〈蜂〉(204)) を用いている場合と，奉「fuŋ」(〈梅〉mak phuŋ 抹奉 (122)) を用いる例とがある。もしも百夷語の形式が共に同一であつたならば，朋，奉のいずれかで統一することができた。しかし，實際にはそうではない。この兩者が書き分けられているのは，百夷語自體において，p'- と f- が弁別的な音素であつたためにちがいない。百夷文字の組織には，p'- と f- を書き分ける2つの單位がなかつた。同じことが上掲 cau〈心〉と〈早い〉についても考えることができる。また，つぎのような例もこの原則に屬する。百夷文字 phwau をもつて書かれている單語〈燒く〉(321) には，漢語 '票'「p'iau」があてられている。當時の漢語には，phwau を表記するに適切な「p'au」があつた。(たとえば胞，泡，袍など) それにも拘らずここで「p'iau」を採用しているのは，百夷語形式が「p'iau」であつたからに外ならない。〈燒く〉「p'iau」は共通タイ語 phrau に對應する。この -r- が百夷語では -i- になつていたのである。

§5. 一般に百夷文字は，百夷語を表記するためには，文字要素が數的にいつて不十分であつた。そのことは，現代パイ・イ語とパイ・イ文字，シャン語とシャン文字の關係から類推することができる[10]。パイ・イ語やシャン語では，言語の上では弁別されるべき形式が，同一の文字連續によつて表記されている例が少くない。たとえばシャン語で [kiːŋ$_2$]〈枝〉, [keːŋ$_1$]〈パイナップル〉, [keŋ$_4$]〈小さい〉の3種の對立した形式が同一の文字連續 k-i-ŋ をもつて表記されている。これと並行した現象が，同じビルマ系文字を用いていた百夷語においてもあつたことは推定に難くはない。

§6. 筆者は，本稿の目標をシャン系言語の歴史の一端を考察することにおいている。しかし，それを大きい視野から扱うことができなかつた。資料の點からいつてなお不十分であるからである。シャン系言語の歴史を對象とする仕事においては，まずアホム語がもつとも主要な位置をしめるにちがいない。しかし，筆者は，不幸にして，アホム語については，Sir Grierson の報告しか見ていない[11]。したがつて，ここでは，アホム語とともにもつとも興味があり，重要な意義を祕めている百夷語を中心として，取上げたいと思う。その手續は，百夷語の音韻體系の推定を基

10) 現代パイ・イ族の用いる文字については「雲南省傣納文字改進方案」(漢文譯本)，雲南人民出版社，1957. を見られたい。シャン文字については，J. N. Cushing, Elementary Handbook of the Shan Language. Rangoon, 1906 および Søren Egerod, Essentials of Shan Phonology and Script.「歴史語言研究所集刊」29本，慶祝趙元任先生六十五歲論文集上册，臺灣，臺北，1957. を參照。

11) G. A. Grierson, Notes on Ahom. *Z. D. M. G.* 56. 1–59 (1920) このほかに，Rai Sahib Golap Chandra Borua, Ahom-Assamese-English Dictionary. Calcutta, 1920 があるが未見。

準として，それと共通タイ語，パイ・イ語，シャン語との對應關係を考察して論を進める[12]。これは一つの試論であつて，將來，その目標のもとに進むための基盤を提供するものである。

百夷語Aと百夷語B——書き言葉と話し言葉

§7. 『百夷館譯語』と名付けられる書物には，數種類の異本が現存する。しかし，その內容から大別すると，つぎの2種類に分類することができる。1) 百夷文字を用いて百夷語を表記し，各單語に該當する漢語と漢語による音表記を與えている體裁の資料。すなわち「百夷語—漢語單語集」。これには「來文」と稱せられる文例が別冊になつていることもある。2) 漢語を基準として，それに該當する百夷語を，漢字をもつて表記した資料，すなわち「漢語—百夷語單語集」。周知のごとく，これらはいずれも百夷文字の順列にしたがつて並べられた辭書風の書物ではなく，意義部門別に主要な單語が選出されて分類された單語集である。石田幹之助教授は，かつて前者の內容をもつたテキストを「乙種本譯語」とよび，後者の內容をもつテキストを「丙種本譯語」と名付けられた[13]。

現在知られている限り，「百夷語・漢語單語集」には，5種類の異つた寫本・刊本がある[14]。それらのテキストに記載された言語が，同一地域における同一種類の百夷語であつたと斷定するには躊躇せざるを得ない (cf. §9)。しかし，おそらくは，雲南省の西南部からビルマ北部にかけてかなり廣い地域にわたつて通用していた，いくつかの方言的な變種を許容した一種の〈書き言葉〉であつたと考えることは許されてよいであろう。これに對して，「漢語・百夷語單語集」に記載された言語は，この「書き言葉」とはやや性格がちがつていた[15]。一般に〈丙種本譯語〉は，實用的な簡易單語集であつたために，そこに記載されていた言語も實際の言語通達に役立ち得る性質のものであつたにちがいない。筆者は丙種本譯語に記載された言語は，當時の〈話し言葉〉であつたと假定している。「乙種本譯語」と「丙種本譯

---

12) 共通タイ語については，拙稿，「マック・スイ語と共通タイ語」『言語研究』28を參照されたい。現代パイ・イ語の資料は，筆者がラングーンに滯在中調査したものである (1959, 2月)。はじめ，本稿の末尾にその報告を添える予定であつたが，都合により別に稿を改めることにした。シャン語は，上記 Cushing の著書のほかに，J. N. Cushing, A Shan-English Dictionary. を用いた。

13) 石田幹之助，「女眞語研究の新資料」『桑原博士還曆記念東洋史論叢』1931.

14) 1) 東洋文庫本（明鈔本），2) 舊 Hirth 氏所藏のベルリン國立圖書館本（明寫本） 3) Amiot 師のパリ國民圖書館本（淸鈔本）以上雜字および來文を具える。4) Edkins 氏所藏の大英博物館藏本。5) パリ，アジア協會本（淸，康熙年間鈔本）以上雜字のみ。このほか來文のみを含む內閣文庫所藏の西域同文表がある。山本達郎，上揭論文 p. 764. および石田幹之助上揭論文，附註參照。ここでは，その中，東洋文庫本およびパリ・アジア協會本を對象とする。

15) このテキストには，8種類あると云はれる。上揭石田教授，p. 1288 ここでは，阿波國文庫本を對象とする。

語」のこのような性格のちがいは單に『百夷館譯語』に限られず，『西番館譯語』についても[16]，『暹羅館譯語』についてもまた認めることができる。以下の論述に便宜のため，かりに前者のテキストに記載された言語を百夷語Aとよび，後者の言語を，それに對して，百夷語Bと名付けることにしたい。

§8. 百夷語Aと百夷語Bの間には，音韻體系に關して，また單語形式自體にかなりの差異が認められる。つぎにその數例を掲げた。

1) 百夷語Aの r- が百夷語Bの h- に對應する[17]。

	百夷語A	漢字音		推定形式		百夷語B	漢字音		推定形式
〈耳〉	ru	魯	「lu」	(409)	「ru」 :	戶	「xu」	(495)	「hu」
〈家〉	rün	倫	「lun」	(451)	「rɤn」:	狠	「xən」	(347)	「hɤn」
〈長い〉	*ri	李	「li」	(280)	「ri」 :	喜	「xi」	(676)	「hi」
〈石〉	riŋ	令	「liŋ」	(45)	「riŋ」:	欣	「xin」	(83)	「hin」
〈雪〉	raa	剌	「la」	(11)	「ra」 :	哈	「xa」	(47)	「ha」
〈錫〉	*rik	力	「li」	(611)	「rik」:	吸	「xi」	(589)	「hik」
〈千〉	riŋ	令	「liŋ」	(629)	「riŋ」:	幸稜	「xiŋ liŋ」	(634)	「hiŋ lɯŋ」

百夷語Aにおいては，r- と h- は對立した關係にたつていた。たとえば上例〈雪〉「ra」に對して，〈五〉「ha」があつた。しかし，百夷語B，すなわち〈話し言葉〉では，r- はすでに h- と對立をしめしていない。〈雪〉も〈五〉も共に‘哈’「ha」である。百夷語Bでは，現代シャン語，パイ・イ語，ラオス語などに認められる r->h- の變化を早くも完了していたのである。しかし，〈書き言葉〉としては兩者を區別して書き分け，その上讀書音として r- をなお保存していたものと考えられる。(cf. §12. XVI)

2) 單語形式の差異が認められる。

	百夷語A			百夷語B		
〈太陽〉	kaŋ wan	扛晚	「kaŋ wan」(5)	:	列	「liɛ」 (173, 14)—「le?」
〈牛〉	ŋu～wu	午	「ˈu」(526)「ŋu～wu」	:	海	「xai」(312)—「xai」
〈行く〉	kwaa	掛	「kua」(248)「kwaa」	:	排	「pʻai」(474)—「pʻai」
〈針〉	khiŋ	悻	「xiŋ」(515)「xiŋ」	:	火	「xuɔ」(396)—「xo」?
〈多い〉	nak	納	「na」(285)「nak」	:	難	「nan」(467)—「nam」
〈青い〉	khyaw	嗅	「xiəu」(582)「xiəu」	:	綠	「lu」(609)—「luʔ」?

〈太陽〉を意味する形式は，現代パイ・イ語 van_{33} シャン語 kaŋ wan であつて，

16) 拙稿，丙種本西番館譯語について，(未發表)

17) 百夷語Aの欄には，百夷文字のローマ字轉寫を，漢字音の欄には，表記漢字の明末音をしめす。推定形式のもとには，この兩者の關係から推定される百夷語形式を入れた。「 」記號については，本稿註21を參照。なおローマ字轉寫の左肩に * を付けたのは，誤寫を訂正したことを示めす。たとえば〈長い〉は，テキストでは li と書かれているけれども，明らかに ri の誤りであるために *ri のごとく書いた。

百夷語Aの形式がそれに對應する。しかし，百夷語Bの形式「lie?」も，またパイ・イ語 liet$_{11}$ シャン語 let$_{2}$〈sunlight〉にあたる。前者は，共通タイ語 wan L$_{1}$ に，後者は Dɛɛt に對應し，この2形式は，〈太陽〉および〈陽光〉の意味をもつて廣くタイ諸語一般に分布している。同樣に〈牛〉の百夷語A形式 ŋu～wu はパイ・イ語 ŋoo 55シャン語 [ŋõ$_{4}$]～[wõ$_{4}$]〈牛〉にあたり，百夷語B「xai」はパイ・イ語 xa:i 55, シャン語 [kwa:i$_{4}$]～[k'wa:i$_{4}$]〈水牛〉に對應する。この2形式はいずれの方言においても〈牛〉および〈水牛〉の異つた意味をはつきりと區別してあらわしている。cf. 共通タイ語 *ŋəu L$_{1}$〈牛〉, *Gwaay L$_{1}$〈水牛〉。したがつて，このような例では，漢語の〈日〉，あるいに〈牛〉に對して，どの百夷語形式をあてたかが問題である。タイ諸語のように，その形式と意味の差異が，いくつかの方言を通じて明確に並行している方言群においては，百夷語AとBの間に認められる上記のごとき單語形式の差異の大部分は，乙種本譯語または丙種本譯語の作者の百夷語に對する不十分な理解乃至は不注意によつて生じた結果であると考え得る余地が殘されている。同樣に〈行く〉は，現代パイ・イ語では kwaa を用いるが，シャン語には kwaa$_{2}$〈to go〉, p'aai$_{3}$〈to go〉の2つの形式がある。(cf. pai$_{1}$〈to step. march〉, 百夷語B〈走〉拜「pai」) 百夷語Aの「kwaa」は前者に，Bの「p'aai」は後者に該當する。それに對して，〈針〉，〈井戸〉，〈青い〉は，百夷語A形式のみがパイ・イ語，シャン語に對應して(〈針〉M. P. xiim$_{35}$, Shan. k'im$_{1}$, 〈井戸〉M. P, nam$_{442}$ mo$_{33}$, Shan. nam$_{5}$mõ$_{2}$, 〈青い〉M. P. xiu$_{35}$, Shan. k'iõ$_{1}$), 百夷語B形式〈針〉「xo」?, 〈井戸〉「taŋ nam」?, 〈青い〉「lu」(?) には，タイ諸語一般にこれに對應する形式を認め得ない。〈多い〉は，百夷語Bの形式「nam」が，パイ・イ語 nam, シャン語 nam$_{1}$, 共通タイ語 nam に對應し，Aの形式 nak は，八百語 nak (695) にあたる。

パイ・イ語・シャン語に對應形式をもたない百夷語が，果して當時の百夷族の話し言葉に特有の形式であつたのか，あるいは作者の不注意に由來する誤記であつたのかはにわかには決定し難い問題である。

百夷語を記載した乙種本百夷館譯語——東洋文庫本とパリ・アジア協會本——

§9. 百夷語Aを記載したテキストの中，代表的な2本東洋文庫本とパリ・アジア協會本の間には，單語形式自體にはほとんど差異が認められない。しかし，百夷文字による綴字面には，著しい異動がある[18]。それにも拘らず，表記漢字の方は，かえつて一致している場合が少くないのである。たとえば〈弓〉は，東洋文庫本では kuŋ, パリ本では kum となつているが，表記漢字は共に'工'「kuŋ」である。これは共通タイ語形 *kuŋ から考えて東洋文庫本の形が正しいことがわかる。〈臭い〉

18) cf. 泉井久之助「百夷館譯語における百夷の言語の聲調について」『言語研究』19•20. 1951, pp. 23–24.

は，東洋文庫本では min と書かれ，パリ本では myan と書かれている。しかしその漢字表記は共に‘命’「miŋ」である。(cf. 共通タイ語，hmen H_1) これらの事實は，乙種本譯語の作者は百夷文字の綴字法を十分知らない百夷人—あるいは漢人であつた可能性を意味していて興味がある。それにも拘らず，この假定にたつてもなお2つのテキストの間の綴字面の異同が，百夷語の年代的な差異乃至は方言的な差異をかなりの程度に反映した結果であると考えることが許されるであろう。このテキストの間の異同には，實際にはいろいろの性格に由來するものが含まれている。つぎにその代表的な3つの場合を考察しよう。まず第一には年代的な差異を考えることができる。東洋文庫本で百夷文字 h- をもつて書かれる百夷語の一部分は，パリ本においても同樣に h- を用いて書かれている。(〈鵞鳥〉ト，han 汗，パ，han など) しかし，一方表記漢字は共通しているけれども，パリ本においては百夷文字 kh- によつて書かれている單語がある。〈煙〉ト hwan 綴：パ khwam 綴 (13)，〈賞與する〉ト puŋ hau 崩毫：パ puŋ khwau 崩毫 (293)，〈香〉ト hwam 綴：パ khwam 綴 (542)，〈監房〉ト hwak 賀：パ kho (khwak の誤?) 賀 (462)，〈足〉パ haa 哈：ト khaa 哈 (423)，〈たかどの〉ト ho 賀：パ kho 賀 (447)

これらの漢字表記から推察するならば，東洋文庫本およびパリ本のもとずいた言語はともに初頭音 x- をもつていたにちがいない。しかし，パリ本においては，それらが kh- を用いて書かれているのは，その初頭音がもともとは「k'-」であつたためであると推定できる。東洋文庫本がもとずいた百夷語では，それに對して，初頭音 k'- が x- にと變化するにしたがつて，綴字面においても文字 h- に書き改められたのであろうと思われる[19]。この事實は，シャン系言語の史的變化を考察する場合にのみ價値をもつにとどまらず，タイ諸語一般の歴史を考える上にも大きい意義をもつている。〈足〉および〈煙〉には，それぞれ共通タイ語形 *khaa H_1, *Gwan L_1 (Siam k'aa $_{35}$, Shan k'aa $_1$, Siam. k'wan $_{33}$, Shan. k'waan) を設定し得る。これに對して，〈與える〉,〈香〉,〈たかどの〉には，T. C. *haï H_3, *hɔɔm H_1, *hɔɔ H_1 の諸形式を推定し得て，初頭の kh- は考えられない。しかし，後者の3つの形式は，百夷語を根據として，*khaï H_3, *khɔɔm H_1, *khɔɔ H_1 にさかのぼることが許されるであろう。そして，kh->x->h- の變化を想定することができる。すなわち，從來共通タイ語形として h- を設定していた一部には，kh- から來源している系列があることがわかつたのである。これと關連して，この kh->h- とは別に，khr->h- の系列がある。これも百夷語形から證明することができる。〈貝螺〉khrwai 壤 (191)，〈尋ねる〉khraa 苛 (254). 前者は，共通タイ語形 hɔɔj H_1 (Siam. hɔɔi $_{35}$, Lao hooi $_{35}$, Shan. hoi $_1$, N. hoi $_{33}$, Lu. hooi $_{33}$) に，後者は，haa H_1 (Siam. haa $_{35}$, Lao haa $_{35}$, Shan. haa $_1$. N. sa $_{33}$. Th. sa $_{33}$, Nung.

19) ここで問題としているのは，これらのテキストが記載している言語について云つているのであつて，テキストの作成年代の前後を論じているのではない。テキストに關しては，パリ本の方が東洋文庫本よりも後の時代に作られたことは確實であると思われる。

Tho の sa は hra から來ているのであろう。cf. 八百語 hraa.）に對應する。この共通タイ語形式は，khrɔɔj Hl および khraa Hl に改めなければならない。

第二に方言的な差異を考えることができる。兩テキストの間の異同が，個々の音單位あるいは個々の單語に個別的にあらわれるのではなくて，一個の音節形式をもつた單語の大部分にわたつて共通して認められる例がある。

I）東洋文庫本 müw 墨「mɛ」：パリ本 mwak 莫「ṃuɔ」—(94)〈時〉ト müw 墨：パ mwak 莫，(258)〈回轉する〉ト khün müw 恨墨：パ khün mwak 恨莫，(419)〈手〉ト müw 墨：パ mwak 莫，(477)〈硯〉ト phak müw 帕墨：パ phraa mwak 帕莫，(198)〈蝶蝶〉ト mak müw 抹墨：パ mak mwak 抹莫

II）東洋文庫本 mwaa 罵「ma」：パリ本 mak 抹「muɔ」—(418)〈肩〉ト mwaa 罵：パ mak 抹；(216)〈狼〉ト mwaa nwai 罵乃：パ mak nai 抹乃（〈山の犬〉の意）

III）東洋文庫本 ŋe 呆「niɛ」：パリ本 me セ「miɛ」—(120)〈蜜柑〉ト mak ŋe 抹呆：パ mak me 抹セ，(339)〈賢者〉ト ŋe te 呆楪：パ me te セ楪

以上の諸例は單に一方のテキストの誤寫として扱うことを躊躇せざるを得ないほど規則性をもつている。この異同は，2種のテキストのもとずいた方言的な差異に歸因すると解釋するのが妥當であると思われる。しかし，〈時〉，〈手〉，〈廻る〉を mwak というタイ方言，〈肩〉，〈犬〉を mwak というタイ方言が存在することは，現在までに報告されてはいない。これらの形式は，タイ語方言としては特殊である。タイ諸語のように基本單語の大部分に關しては相互にはつきりとした對應關係を保持している言語群において，全部の方言が一致して末尾子音をもたない〈時〉，〈手〉，〈廻る〉，〈肩〉，〈犬〉に對して，それ以外の單語については他のタイ方言と十分に並行性をもつている百夷語が，それらのわずかに限定された單語のみ特殊な形式をもつていたとは考えられない。一方このテキストには，つぎに r- と l- の混同について考察するごとく漢字表記，すなわち漢語の音韻論的基盤にたつて知覺し記述されたタイ語にもとずいて，百夷文字を用いたと考えられる場合が少なくない。したがつて，これらの末尾子音が百夷綴字面にあらわれているのは，表記漢字から類推的に使用された誤用によるものと解釋できる。たとえば，漢語‘莫’をもつて表記される百夷語は，〈雲〉のときには百夷文字 mwak を用いて書かれているために，同じく漢語‘莫’にあたると知覺された〈手〉，〈時〉，〈廻る〉などにも，〈雲〉から類推して mwak と書いた可能性が大きい。同樣に mak〈肩〉〈犬〉‘抹’は〈果物〉mak 抹から類推された綴字法であろう。筆者は，この根據からパリ本のもとずいた百夷語の形式は，mwa および ma であつたと解釋したい。この綴字によつて表記された百夷語が，東洋文庫本 müw，mwaa によつて書かれた形式と對應していた。上記 I）にはト müw「mɤ̈」：パ mwa「mɯa」(?) を，II）にはト mwa：パ ma の方言的な對立を假定する。III）のŋe 對 me も，同樣にはつきりとした方言的變種であつたと考えられる。

第三に漢語の音韻體系に影響された綴字面の混同をあげよう。

1. r- と l- の混同　當時の漢語には r- と l- の音素對立はなかつた。したがつて百夷語の r- と l- を共に漢語 l- をもつて表記せざるを得なかつた。その結果，つぎの諸例に見られるごとく，百夷文字 r- と l- の使用に混同が生じた。

1) 〈境界〉ト ryam müŋ 璉猛：パ liň müŋ 璉猛「lien müŋ」(61). パリ本 liň が正しい。cf. Shan. len$_1$ 〈a border〉, 八百語 dǎn mōŋ 臉猛 (107)

2) 〈驢馬〉ト la：刺：パ raa 刺 (209). la：が正しい。 cf. Shan. laa$_4$ 〈a mule〉, 八百語 lwaa 刺 (238)

3) 〈伯父〉ト luŋ 隴：パ ruŋ 隴 (352). luŋ が正しい。cf. Shan. luŋ$_4$ 〈uncle〉 八百語 lūŋ (380)

4) 〈嫂〉ト lu 魯：パ ruu 魯 (353). lu が正しい。 cf. Shan. lō$_4$ 〈a man's elder brother's wife〉.

5) 〈家〉ト rün 倫：パ lum 倫 (451). rün が正しい。cf. Shan. hön$_2$ 〈house〉

6) 〈甕〉ト raŋ nam 郎喃：パ laŋ nam 浪喃 (486). raŋ nam が正しい。 cf. Shan. hâŋ$_4$ nam$_5$ 〈a water trough〉

7) 〈帶〉ト sai raŋ 賽浪：パ sai laŋ 賽浪 (556). sai raŋ が正しい。cf. Shan. saːi$_1$ haːŋ$_5$. 〈a girdle〉

8) 〈黃色い〉ト lüŋ 稜：パ riŋ 稜 (584). lüŋ が正しい。cf. Shan. löŋ$_1$ 〈to be yellow〉

9) 〈錫〉ト ryak 力：パ lik 力 (611). ryak が正しい。cf. Shan. hēk$_2$ 〈tin〉 八百語 hryɔk 列 (678)

以上の諸例は，r- と l- に關しての異同のすべてではない。これらの異同は，單に百夷文字の使用における混同乃至は誤寫にすぎなく方言的な特色を代表しているものとは考えられない。

2. -p, -t, -k, -#：-m, -n, -ŋ-, ň の混同

1) 〈雹〉ト lip 力：パ lik 力 (10). lip が正しい。 cf. 八百語 lūb hlǎb 六列 (14)

2) 〈票〉ト mak tup 抹篤：パ mak tuk 抹篤 (126). mak tup が正しい。cf. Shan. māk$_2$ top$_4$ 〈a chest nut〉

3) 〈生の〉ト lip 力：パ lik 力 (300). lip が正しい。cf. Shan. līp$_4$ 〈to be unripe〉. 八百語 ɒip 力 (601)

4) 〈口〉ト sup 素：パ suk 素 (407). sup が正しい。cf. Shan. sōp$_4$ 〈mouth〉

5) 〈鴨をさく〉ト pat pit 八必：パ pak pii 八必 (526). pak が正しい。cf. Shan. pāk$_3$ 〈to skin〉

6) 〈琥珀〉ト pat yaŋ 八仰：パ pak ňaŋ 八養 (601). pat が正しい。cf. 八百語 pad ňāŋ (634)

7) 〈深い〉ト lük 勒：パ lüt 勒 (663). lük が正しい。cf. Shan. lük$_5$, 〈to be deep〉

8) 〈多い〉ト nak 納：パ na：那 (285). nak が正しい。 cf. 八百語 nak 納

(694)

9) 〈軍人〉ト luk sük 六色：パ luk süw 六色 (371). sük が正しい。cf. Shan. luk_3 $sük_4$ 〈soldier〉

10) 〈肝〉ト tap 荅：パ ta：荅 (426). tap が正しい。cf. Shan. tap_4 〈liver〉

11) 〈肺〉ト pwat 布：パ pu 布 (429). pwat が正しい。cf. Shan. $pɔt_2$ 〈lungs〉

12) 〈骨〉ト nut 奴：パ nu 奴 (438). nut が正しい (?)。 cf. Shan. lup_2 〈bone〉 八百語 pūk 六 (531)

13) 〈満ちる〉ト tim 定：パ tiŋ 定 (276). tim が正しい。cf. Shan. tim_1 〈to be full〉

14) 〈婦人〉ト phu ňiŋ 僕寧：パ phu ŋin 僕寧 (373). ňiŋ～(ŋiŋ?) が正しい。cf. Shan. $p'uu_3$-$yiŋ_4$. 〈woman〉

15) 〈胃〉ト pum 本：パ pün 本 (430). pum が正しい。 cf. Shan. pum_1 〈the external part or outside of the abdomen〉

16) 〈醤油〉ト nam cim 喃枕：パ nam cin 喃枕 (530). cim が正しい。 cf. Shan. sim_4 〈to be salt〉

17) 〈猿〉ト lin 領：パ liŋ 領 (212). liŋ が正しい。cf. Shan. $liŋ_4$ 〈monkey〉 八百語 liŋ 零 (278)

以上の諸例は，末尾音 -p, -t, -k 相互を，そしてそれらと —# との間を十分に辨別し得る形式が，當時の漢語に存在しなかつたことに由來している。-n, -m, -ŋ についても同樣であつた。

これらの混同または誤寫が表記漢字すなわち漢語音を通じて生じたであろうことに注意すべきであると思う。

百夷語（AおよびB）の音韻體系

§10. このテキストに採錄されている單語を相互に對照することによつて，あるいはさらにそれらをパイ・イ語，シャン語の形式乃至は共通タイ語形と比接することによつて，一連の形態素を抽出する手續については，とくに問題はない。現在我々は，この言語を直接に觀察することができないけれども，かつての漢人が記述した結果を通じて考察することができる。たとえば (464) thin maa 聽麻〈馬小屋〉, (524) khaa maa 哈麻〈馬を殺す〉, (519) an maa 案麻〈鞍〉, (520) cwaŋ maa 庄麻〈鞭〉を對照することによつて，共通形式 maa 麻をとりだすことができ，この形式が〈馬〉を意味していたことも，現代パイ・イ語 maa シャン語 ma_5 共通タイ語 maa_{L3} と比接することによつて一層確認される。かつ，この形態素が，一方において漢字‘馬’によつて表記されている (22) lum ma：倫馬〈風が來る〉, (278) au ma：奥馬〈持ち來る〉, の ma：〈來る〉あるいは (604) ma：na：馬那〈瑪瑙〉, (607) tam ma：膽馬〈寶石〉の ma：〈寶石？〉とは異つた單位であることも容易にわかる。漢字‘麻’(去聲) および‘馬’(如聲) による表記わけは，おそ

らくこれらの形式のもつトネームの差異を表記したものであろう（cf. Shan. ma_5〈馬〉: maa_4〈來る〉）。同様な手續によつて，thin 聽が〈小屋〉を意味し，an 案が〈鞍〉を，cwaŋ が〈鞭〉を意味していたであろうこともわかる。

この例からでも推察できるごとく，この譯語における漢語による表記法すなわち漢字の用い方は，十分に規則的な態度をもつてなされたのであつて，我々は當時の漢人の記述にかなりの程度に信頼をおくことができる。

§11. 原則的には上述の手續によつて抽出し得る百夷語の形態素は，其他のタイ諸語一般と並行して，一つのトネームをもつた CVC 音節から成りたつていたと考えられる。C- の位置には，A 言語の「pl-」，B 言語の「k'r-」のほかは，すべて單純子音に限られている。V の位置には V および VV が認められ，-C の位置には，限定された單位のみがあらわれ，V あるいは VV と一定の連續關係をもつていた。この形式をもつ百夷語の一つの形態素は pl-VC（A語），k'r-VC（B語）のタイプが漢語の2音節で表記される以外は，すべて漢語1音節すなわち漢字1字によつて表記されている。

しかし，そのトネームを漢字表記から再構成することはむつかしい。

§12. 百夷語Aにおいては，C- の位置には百夷語音素を表記した百夷文字 k, kh, ŋ, c, ch, ň, p, ph, m, r, l, s, h, w, y, ', khr, phr-, pl, があらわれる。これに對して，當時の漢語の音素體系には，k, k', t, t', n, p, p', m, ts, ts', s, tṣ, tṣ', ʐ, ṣ, ·, x, l の18種の初頭にたつ音素があつた。上掲の百夷文字が書きあらわした百夷語に，漢語のどの音素があたえられているかを考察し，そこから百夷語の音素を推定しなければならない。百夷語Bについては，それと關連して考える。

I. 百夷語A. k「k-」: 漢語 k-: 百夷語B.「k-」

百夷文字 k をもつて書かれた百夷語（A）には例外なく漢語 k- があてられる[20]。例 kai 蓋「k-」〈雞〉(183), kau 高「k-」〈舊い〉(651), kaŋ 扛「k-」〈石弓〉(518), küw 革「k-」〈鹽〉(528), kaŋ 扛〈中間〉(655), kwaŋ 光「k-」〈鹿〉(215)

これらに對應する百夷語B の形式も，漢語 k- によつて表記されている。〈雞〉蓋 (317),〈舊い〉告「k-」(167),〈石弓〉杠 (407),〈鹽〉革 (562),〈中間〉膽岡「k-」(654),〈鹿〉光 (311). この原則には例外がない。したがつて上記の單語のみならず，漢語によつて表記されている單語にはすべて，百夷語 A・B 共に，k- を認める[21]。百夷語 k- は共通タイ語，k-, kl- および g- から來源している。

---

20) 實際には，一例 krau cau〈思う〉克遮 (223) があつて，百夷文字 kr- に漢語 克「k'-」があてられている。しかし，この例は 百夷文字の誤寫であつて，正しくは khrau cau とするべきである。シャン語 k'raü 3 caü 1〈to consider, reflect〉, k'aü 3〈to desire, wish for〉 パイ・イ語 k'aɯ〈思う〉に對應する。

21) 嚴密にいうと，これらの單位はいずれも推定形式である。筆者は，このような體系的な再構成の手續の結果得られた形を「 」でつつんであらわしたいと思う。これは漢人が漢語の音素體系にもとずいて記述した結果を再び記述し改めた單位ということができる。

〈九〉	T. C.	kau M3	:	百	kau	: M. P.	kau 31	:	Shan	kau 3
〈舊い〉	T. C.	kau M2	:	百	kau	: M. P.	kau 11	:	Shan	kau 2
〈恐れる〉	T. C.	kləu M1	:	百	kuu	: M. P.	ko 33	:	〃	kō 1
〈鹽〉	T. C.	klïə M1	:	百	kɤ	: M. P.	kɤ 33	:	〃	kö 1
〈人〉	T. C.	gon L1	:	百	kun	: M. P.	kon 55	:	〃	kōn 4
〈商う〉	T. C.	gaa L1	:	百	ka:	: M. P.	kaa 55	:	〃	kaa 3

1. 共通タイ語 k- →百夷語 k- →現代パイ・イ語 k- : シャン語 k-
2. 共通タイ語 kl- →百夷語 k- →現代パイ・イ語 k- : シャン語 k-
3. 共通タイ語 g- →百夷語 k- →現代パイ・イ語 k- : シャン語 k-

II. 百夷語A. kh「k'-, x-」: 漢語 k'-, x-: 百夷語B.「k'-, x-」

百夷文字 kh を用いて書かれた單語には漢語 k'- および x- の2種によるはつきりとした表記わけが認められる。例 khaw 粇「k'-」〈米〉(522): khwau 毫「x-」〈入る〉(232), khum 困「k'-」〈にがい〉(546), khun 混「x-」〈毛〉(404); khiŋ 欠「k'-」〈硬い〉(550), khiŋ 悻「x-」〈身體〉(398); khii 其「k'-」〈糞〉(439), khün 恨「x-」〈夜〉(82) など。したがつて，百夷語Aにおいては，閉鎖音 k'- と摩擦音 x- とは，對立した2種類の音素であつたことがわかる。この事實は，また百夷語Bにおいても認められる。〈米〉考「k'-」散 (255), 〈にがい〉困 (571), 〈嫋〉愧「k'-」陶 (431) の k'- に對立して，〈夜〉岡狠「x-」(140), 〈身體〉 荇「x-」(500) の x- の系列がある。

この百夷語に認められる k'- および x- は，實は他の根據にもとずいて推定することのできる共通タイ語形 *k'- および *qh- に對應するものである。シャン語，ヌン語，トー語，龍州土語の k' およびそれに對應するシャム・ラオ語の k'- に對して，白タイ語は次表のごとく k' および x の2系列の對應關係をもつている[22]。

	Shan	Nung	Tho	Lung	Siam	Lao		Tai Blanc
〈硬い〉	k'eŋ 1	k'eŋ 1	k'eŋ 1	k'eeŋ 1	k'ɛɛŋ 2	k'ɛɛŋ 2	:	k'eŋ 1
〈糞〉	k'ii 3	k'i 3	k'i 3	k'i 3	k'ii 3	k'ii 3	:	k'i 3
〈米〉	k'au 3	k'au 3	k'âu 3	k'au 3	k'au 3	k'ao 3	:	k'aô 3
〈入る〉	k'au 3	k'au 3	k'âu 3	k'au 3	k'au 3	k'ao 3	:	xaô 3
〈腕〉	k'en 1	k'en 1	k'en 1	k'een 1	k'ɛɛn 2	k'ɛɛn 2	:	xen 1
〈賣る〉	k'aai 1	k'ai 1	k'ai 1	k'aai 1	k'aai 2	k'aai 2	:	xay 1

この白タイ語における k'- および x- の對應は共通タイ語の2種の異つた系列を保持している狀態であることは，13世紀 Ramkhamhäng 王碑文および八百語を考察することによつて證明することができる。

白タイ語 k' は Ram. 碑文 kh-, 八百語 kh- に，x- は，Ram. 碑文 qh-, 八百語x- に對應する（〈米〉T. B. k'aô 3 →碑文 khau², 八百 khau, 〈乘る〉 T. B.

22) この文献については，拙稿 Tonematica Historica, トネームによるタイ諸語比較言語學的研究『言語研究』25 (1954) p. 45 を見られたい。

k'ii 2 →碑文 khii[1]; 〈入る〉 T. B. xaô 3 →碑文 qhau[2], 八百 xau, 〈昇る〉 T. B. xün 3 →碑文 qhɯɯn, 八百 xɯ̄n) この根據にもとずいて, 前者の系列には, 共通タイ語 kh- を, 後者の系列には qh- を定立することができる[23]。百夷語に認められる k'- および x- は, まさにこの2系列に對應しているのである。したがつて, 百夷語Aでは, 百夷文字 kh- を用いて書かれていて, 漢語 k' をもつて表記されている單語には, k'- を, x をもつて表記されている單語には x- を推定することができる。百夷語Bについても同樣に k' および x- を推定することができる。しかし, 百夷語B x は, この資料のみからは決定し難い。何故なら漢語 x- は百夷語 x- とともに百夷語 h- をも區別なく表記しているからである。したがつて, 百夷語Bの形式が百夷語Aまたはそのほかのタイ語のどのような形式に對應するかが明らかになつてはじめて, x- または h- のいずれかを推定することができる。たとえば, このテキストでは, 〈脚〉も〈五〉もともに 哈「xa」をもつて表記されているが, 實際には〈脚〉は「xa」(T. C. qhaa H_1), 〈五〉は「ha」(T. C. haa H_3) であつたと考えられる。k'- を初頭音とする單語と x を初頭音とする單語の關係は, 百夷語AおよびBにおいて, 大部分が並行しているけれども, つぎのような例も認められる。〈しようが〉 A. khiŋ 悻「x-」(154). B. 慶「k'-」(270), 〈齒〉 A. khyaw 嗅「x-」(408) B. 求「k'-」(429). この2例の百夷語Bの形式は, 共通タイ語形式〈しようが〉 *qhiŋ H_1, 〈齒〉 *qhiəu H_3 から見ると[24], 當然 x- をもつべきであつて, k'- は不規則形であるように思われる。事實, 〈齒〉と同一形式をもつ〈青い〉 T. C. qhiəu H_1 は, A. khyaw 嗅 (582), B. 嗅と表記されている。百夷語 A. B. 共に「xiəu」であつたと推定される。これに對して, 百夷語Bにおいて, 〈齒〉求および〈しようが〉慶が共に漢語 k'- をもつて表記されているのは, 百夷語 B にあつた qh- を表記した可能性がのこされている。すなわち, 百夷語Bにおいては x- よりも古い形式と考えられる *qh- がこの2單語において保存されていたと假定することが許されるであろう。〈齒〉は *qhiəu, 〈しようが〉は *qhiŋ であつた。しかし, 實際には, この qh- と上記の k'- がはつきり差別をもつた單位であつたか否かを決定することはできない。

百夷語Aには 百夷文字結合 khr- を用いて書かれた單語が若干ある。それらには一例, khrwai 壞「x-」〈貝螺〉(191) が x- で表記されるほかは, すべて漢語 k'- があてられる。 khraa: 苛「k'-」〈尋ねる〉 (254), khraa: 〈奴隷〉 (368), khruu 庫「k'-」〈笑う〉 (236), khruu 庫〈橋〉 (468), khruk 哭「k'-」〈臼〉 (499), khrwaŋ 況「k'-」〈寺〉 (449), khran 勘「k'-」〈懶惰な〉 (318).

---

23) この兩者の對立を kh-: x- としないで, kh-: qh- としたのは, 後者の qhが多くの言語において, kh- と合一する現象を, よりよく說明し得るからである。

24) 〈しようが〉 Siam. k'iŋ 35. Lao. k'iŋ 35. L. J. k'iŋ 35. Shan k'iŋ 334. T. B. xiŋ 33. N. TH. LU. k'iŋ 33, 〈齒〉 Siam. k'iaw 31. Lao k'ɛw 31. L. J. k'īo 221. Shan k'iō 22, T. B. xeô 213, N.TH. k'eo 313. Lu. k'eeu 35. この對應關係から, この兩語は共通タイ語 qh の系列に屬すべきことがわかる。

これらの單語の初頭音が「k'ɣ-」であつたか「k'-」であつたのかを決定することはむつかしい。しかし，漢字表記の原則的な態度から，これらの形式には k'- を推定し，上記のk '- と同一の音素であつたと假定したい。百夷語Bには〈奴隷〉客剌「k'ɛlaa」の例がある。これは，k'ra を意圖したものであつて，（cf. 共通タイ語 khraa～khaa H_1）この言語には k'- に對立した k'r- が存在していた。しかし，上記の諸例のいずれにも「k'r-」が對應しているわけではない。他の一例〈橋〉には，庫「k'u」があてられている。これには「k'uu」を推定する。

百夷語 A. B. の k'- およびBの k'r- は共通タイ語 kh-, khr-, Gr- に對應する。

〈にがい〉 T. C. khom H1 : 百 k'um : M. P. xom 35 : Shan k'om 1
〈米〉 T. C. khau H3 : 百 k'au : M. P. xau 31 : Shan k'au 3
〈笑う〉 T. C. khrəu H1 : 百 k'uu : M. P. xo 35 : Shan k'ō 1
〈奴隷〉 T. C. khra～kha H3 : 百 A. k'aa : M. P. xa 31 : Shan k'ā 3
B. k'raa
〈懶惰な〉 T. C. Graan L3 : 百 k'aan : M. P. xaan 442 : Shan k'aan 5
〈臼〉 T. C. Grok : 百 k'uk : M. P. ? : Shan k'ok 5

4. 共通タイ語 kh→ 百夷語 k'- →現代パイ・イ語 x-: シャン語 k'-
5. 共通タイ語 khr→百夷語 k'- →現代パイ・イ語 x-: シャン語 k'-
6. 共通タイ語 Gr→ 百夷語 k'- →現代パイ・イ語 x-: シャン語 k'-

百夷語 A, B の x は共通タイ語 qh, -G- に對應する。

〈賣る〉 T. C. qhaai H1 : 百 xaai : M. P. xaai 35 : Shan k'aai 1
〈脚〉 T. C. qhaa H1 : 百 xaa : M. P. xaa 35 : Shan k'aa 1
〈しようが〉 T. C. qhiŋ H1 : 百 A. xiŋ, B. qhiŋ : M. P. xiŋ 35 : Shan k'iŋ 1
〈晩〉 T. C. Gam L2 : 百 xam : M. P. xam 33 : Shan k'am 3
〈夜〉 T. C. Gïn L1 : 百 xɯn : M. P. xɯn 55 : Shan k'ün 4
〈金〉 T. C. Gam L1 : 百 xam : M. P. xam 55 : Shan k'am 4

7. 共通タイ語 qh →百夷語 x- →現代パイ・イ語 x-: シャン語 k'-
8. 共通タイ語 G→百夷語 x- →現代パイ・イ語 x-: シャン語 k'-

百夷語Aでは，軟口蓋音の系列には，k-: k'-: x- の3者の對立があり，百夷語Bでは，この3者のほかに，qh- それに子音結合 k'r- が加つていたと推定する。

III. 百夷語A. c「tʂ-」: 漢語 tʂ-: 百夷語B.「tʂ-」

百夷文字 c をもつて書かれる單語には，漢語 tʂ があてられている。例 luk cai 六債「tʂ-」〈子供〉(350), cau 遮「tʂ-」〈心〉(412), cau 招「tʂ」〈早い(時)間〉(91), cuŋ 中「tʂ-」〈傘〉(503). B方言のこれらに該當する單語には，同樣に漢語 tʂ- があてられる。〈子供〉招 (210), 〈心〉招(505), 〈傘〉莊 (387). したがつて，これらの單語および漢語 tʂ- によつて表記された單語には，百夷語「tʂ-」を推定する。百夷語 tʂ- は，共通タイ語 *c- および *ǰ- に對應する。

〈心〉 T. C. caï M1 : 百 tʂɤ̆ : M. P. tsaɯ 33 : Shan saü 1
〈主人〉 T. C. cau M3 : 百 tʂau : M. P. tsau 31 : Shan sau 3

〈早い〉 T.C. ǰau L3 : 百 tsau : M.P. tsau 442 : Shan sau 5
〈象〉 T.C. ǰaaŋ L3 : 百 tsaaŋ : M.P. tsaaŋ 442 : Shan saaŋ 5
9. 共通タイ語 c- →百夷語 tş →現代パイ・イ語 ts(～tş-): シャン語 s-
10. 共通タイ語 ǰ →百夷語 tş →現代パイ・イ語 ts(～tş-): シャン語 s-

IV. 百夷語A. ch-「tş'-」: 漢語 tş'-: 百夷語B.「tş'-」

百夷文字 ch- を用いて書きあらわされる單語には, 漢語 tş'- があてられる。khau chaa 烤察「tş'-」〈麥〉(166), chak 察〈細かに〉, chüŋ 秤「tş'-」〈はかり〉(496), chit te 赤「tş'-」揲〈はでやか〉(316), chye yin 車「tş'-」印〈舍人〉(365). 百夷語Bには, 〈麥〉考茶「tş'-」(256), 〈雲南〉猛車 (112), 〈客室(廳)〉稱「tş'-」(357), の例がある。これらの單語および漢語 tş'- をもつて表記された百夷語には tş'- を推定する。しかしこれに對應する共通タイ語形式は明らかではない。〈はかり〉〈舍人〉は漢語よりの借用語であろう (cf. § 17～)。

V. 百夷語A. t「t-」: 漢語 t: 百夷語B.「t」

百夷文字 t を用いて書かれる百夷語には, 漢語 t- があてられる。tai 歹「t-」〈死ぬ〉(301), pat-tu 八都「t-」〈戶〉(465), ta: 荅「t-」〈眼〉(410), twau 刀「t-」〈壺〉(485), taŋ 黨〈道〉(39). 百夷語Bには〈戶, 門〉八都 (342), 〈眼〉荅 (494), 〈壺〉刀 (385), 〈路〉黨 (70) などの例がある。したがつて, 漢語 t によつて表記されている百夷語には, t を推定して問題はない。共通タイ語 t および d がこれに對應する。

〈眼〉 T.C. taa M1 : 百 taa : M.P. taa 33 : Shan -taa 1
〈戶〉 T.C. tuu M1 : 百 -tuu : M.P. -tuu 33 : Shan -tu 1
〈銅〉 T.C. dɔɔŋ L1 : 百 twaŋ : M.P. twaŋ 55 : Shan tɔŋ 4
〈眞實〉 T.C. dɛɛ L3 : 百 tie : M.P. tie 442 : Shan ?
11. 共通タイ語 t- →百夷語 t- →現代パイ・イ語 t-: シャン語 t-
12. 共通タイ語 d- →百夷語 t- →現代パイ・イ語 t-: シャン語 t-

VI. 百夷語 A. th-「t'-」: 漢語 t'-: 百夷語 B.「t'-」

百夷文字 th を用いて書かれる單語には, 漢語 t' があてられる。tham 嘆「t'-」〈問う〉(227), thu 禿「t'-」〈豆〉(167), thun 褪「t'-」〈犂〉(510), thu 禿〈箸〉(484), thaw cit 陶「t'-」只〈藤〉(117). 百夷語Bには, 同樣に〈豆〉唾「t'-」(272), 〈犂〉褪「t'-」(399), 〈箸〉兎「t'-」(384) などの例がある。したがつて漢語 t'- をもつて表記される百夷語に, t'- を推定することには問題がない。共通タイ語形 t'- がこれに對應する。

〈問う〉 T.C. thaam H1 : 百 t'aam : M.P. t'aam 35 : Shan t'aam 1
〈豆〉 T.C. thəu H1 : 百 t'uu : M.P. t'o 35 : Shan t'ō 4
〈藤〉 T.C. thau H1 : 百 t'au : M.P. ? : Shan ?
〈箸〉 T.C. thuu H(?): 百 t'uu : M.P. t'uu 11 : Shan t'uu 2
13. 共通タイ語 th- →百夷語 t'- →現代パイ・イ語 t'-: シャン語 t'-

VII. 百夷語 A. p「p-」: 漢語 p: 百夷語 B.「p-」

百夷文字 p を用いて書かれる單語には，漢語 p- があてられる。 puu 布「p-」〈蟹〉(189), pwat 卜「p-」〈肺〉(429), pii 筆「p-」〈年〉(93), pǎ 孛「p-」〈父〉(342), pe 別「p-」〈羊〉(211) etc. 百夷語Bにも同様に〈蟹〉補「p-」(329), 〈年〉比「p-」(161), 〈父〉波「p-」(421), 〈羊〉秕「p-」(314) などの例がある。したがつて，漢語 p- によつて表記される單語には，百夷語 p- を推定する。これは共通タイ語 p- および b- に對應する。

〈年〉 T. C. pii M1 : 百 pii : M. P. pii 33 : Shan pii 1
〈かに〉 T. C. puu M1 : 百 puu : M. P. puu 33 : Shan pû 1
〈兄〉 T. C. bii L2 : 百 pii : M. P. : Shan pii 3
〈羊〉 T. C. bɛɛ L1 : 百 pie : M. P. pie 55 : Shan pè 5

14. 共通タイ語 p- →百夷語 p- →現代パイ・イ語 p-：シャン語 p-
15. 共通タイ語 b- →百夷語 p- →現代パイ・イ語 p-：シャン語 p-

百夷語Aには百夷文字 pl- を用いて書かれる單語が一つある。plaa 八剌「pala」〈魚〉(180) である。これには「plaa」を推定しよう。これに對して百夷語Bでは〈魚〉は 巴「pa」と表記されているから (318), この言語では「paa」であつたと考えられる。これは共通タイ語 plaa M1 に對應する。〈魚〉T. C. plaa M1：百 A. plaa B. paa : M. P. p̆aa 33 : Shan paa 1. しかし，共通タイ語 pl- をもつそのほかの單語が百夷語でどのような形式をもつていたか明らかではない。(たとえば〈蛭〉T. C. pliŋ M1, 〈目覺める〉pluk, 〈環〉plɔɔk)

VIII. 百夷語 A. ph「p'-, f-」：漢語 p'-f-. ：百夷語 B.「p'-, f-」

百夷文字 ph- を用いて書かれる單語には，漢語 p'- および f- の2種類の表記わけがある。 phuu 僕「p'-」〈人〉(374), phum 噴「p'-」〈髪〉(405), phuŋ 朋「p'-」〈蜂〉(204), phwai 派「p'-」〈火〉(328) に對立して, phun 忿「f-」〈雨〉(4), phun 粉「f-」〈柴〉(163), mak phuŋ 抹奉「f-」〈梅〉(122) がある。この2系列の間には，相補的な關係を認めることができない。したがつて，百夷語Aにおいて，p'- と f- は辨別的な音素であつたと考えてよいであろう。百夷語Bにも，この區別は保たれていた。〈人〉僕 (438), 〈髪〉噴 (503), 〈蜂〉朋 (284) の「p'-」に對立して，〈雨〉忿 (36), 〈梅〉抹鳳「f-」(227), 〈天〉法「f-」(2) の例がある。ただし，〈火〉は百夷語Bにおいては「p'ai」ではなく，「fai」であつた。〈火〉匪「fei」(50). 百夷語Bにも同様に p' および f を推定する。

一方，百夷文字 phr- をもちいて書かれた單語には例外なく，漢語 p'- があてられる。例 phrii 辟「p'-」〈辛味〉(545), mo phrii 磨辟〈僧〉(336), phran cau 盼遮〈心を勞する〉(256), phraa 怕「p'-」〈岩〉(56), phrak 怕〈白い〉(585), phrak 怕〈離れる〉(260) など。百夷語Bには，〈辛味〉辟 (572), 〈白い〉迫「p'-」(612), 〈小皿〉一撇「p'-」(382) などの例があつて，同様に漢語 p'- をもつて表記されている。これらの單語が，實際には「p'ʂ-」であつたか「p'-」であつたかを決定することはむつかしい。しかし，表記漢字に忠實に，「p'-」を假定し，上述の「p'-」とは同一の音素であつたと認めておきたい。

百夷語 f-, p- は，共通タイ語 f-, v- および p‘-, p‘r- に對應する。

〈雨〉 T.C. fon H1 : 百 fun : M.P. fon 35 : Shan p‘õn 1
〈夢〉 T.C. fan H1 : 百 fan : M.P. fan 35 : Shan p‘an 1
〈火〉 T.C. vai L1 : 百 A. p‘ai B. fai : M.P. fai 55 : Shan p‘ai 4
〈天〉 T.C. vaa L3 : 百 faa : M.P. faa 442 : Shan p‘a 5
〈薪〉 T.C. vïïn L1 : 百 fɯɯn : M.P. : Shan p‘ün 4

16. 共通タイ語 f-<*p‘- →百夷語 f- →現代パイ・イ語 f-: シャン語 p‘-
17. 共通タイ語 v-<*b- →百夷語 f-, p‘-→現代パイ・イ語 f-: シャン語 p‘-

〈人〉 T.C. phuu H3 : 百 p‘uu : M.P. p‘uu 31 : Shan p‘û 3
〈髮〉 T.C. phrom H1 : 百 p‘um<p‘rum : M.P. p‘om 35 : Shan p‘om 1
〈靈魂〉 T.C. phrii H1 : 百 p‘ii<p‘rii : M.P. : Shan p‘ii 1
〈蜂〉 T.C. phrïŋ H3 : 百 p‘ɯŋ<p‘rɯŋ : M.P. p‘ɯŋ 31 : Shan p‘üŋ 3
〈燒く〉 T.C. phrau H1 : 百 A. p‘iau B. p‘au : M.P. p‘au 35 : Shan p‘au 1
〈離れる〉 T.C. braak : 百 p‘aak<p‘raak : M.P. p‘aak : Shan p‘aak 3

18. 共通タイ語 phr-, br- →百夷語 p‘- →現代パイ・イ語 p‘-: シャン語 p‘-

以上の比較から百夷語において p‘- を保存している單語はもとは共通タイ語 phr- または br- であつたと假定することができる。〈人〉はもともと phruu であつた。それに對して百夷語で f- をもつ單語はもともとは，共通タイ語 *ph-, b- より來源している。すなわち，ここに *phr-, br->p‘-, *ph-, b->f- の關係を考えることができる。この假定にたつたならば〈火〉の共通形式は *brai L1 とすべきであろう。この事實は，タイ諸語一般の唇齒音系列の分裂の問題を考える上に大きい基盤を與えるとともに，タイ語の變化と多くの點で並行關係をしめしている漢語のいわゆる輕唇音化の發出に關しても，一つの示唆を與えるものであると思う。

IX. 百夷語 A. s-「s-」: 漢語 s- ts‘-: 百夷語 B.「s-」

百夷文字 s- を用いて書かれた單語には，漢語 s- があてられる。例 sai 賽「s-」〈腸〉(414), swam 算「s-」〈酸い〉(529), suŋ 送「s-」〈送る〉(259), sai 賽〈沙〉(88), süw 色「s-」〈買う〉(273), kan sai 幹賽〈左〉(640). これに該當する百夷語Bの單語も，同樣に，漢語 s- によつて表記されている。〈酸い〉巡「s-」(566),〈送る〉送 (458),〈買う〉司 (481),〈沙〉塞 (88). これに對して，漢語 ts‘- が用いられるのは，つぎの2例である。siw 酋「ts‘-」〈捕捉する〉(271), ko siw 果酋〈朋友〉(363). 當時の漢語には siu あるいは siəu という音節はなかつた。したがつて，漢語の ts‘ は s- に對立した音素を表記したものではなくて -iw に連續する場合の s- を表記したものと考えたい。百夷語 AB に s- を認める。百夷語 s- は共通タイ語 *s- z- dr- に對應する。

〈腸〉 T.C. sai H3 : 百 sai : M.P. sai 31 : Shan sai 3
〈帶〉 T.C. saai H1 : 百 saai : M.P. saai 35 : Shan saai 1
〈左〉 T.C. zaai L3 : 百 -saai : M.P. -saai 442 : Shan -saai 5
〈買う〉 T.C. zïï L3 : 百 A. sɤ B. sɯ : M.P. sɯ 442 : Shan sö 5

〈砂〉　T.C. draai L1：百　saai　：M.P. saai 55 ：Shan saai 4

19.　共通タイ語 s-, z-, dr- →百夷語 s- →現代パイ・イ語 s-：シャン語 s-

X.　百夷語 A. ŋ.「ŋ-ň-」：漢語 ˙-, n-. 百夷語 B.「ŋ-」

百夷文字 ŋ- をもつて書かれた單語には，漢語 ˙- または n- があてられる。例 ŋaa 阿「˙-」〈牙〉(614), ŋuu 午「˙-」〈蛇〉(193), ŋün 恩「˙-」〈銀〉(699), phu ŋiŋ（ト ňiŋ）僕寧「n-」〈婦人〉(373), ŋin（ト nüŋ）寧〈動く〉(308), ŋin 寧〈聞く〉(219). 漢語 n- が用いられる例は，ŋiŋ または ŋin 音節に限られている。ŋi- の連續は實際には ňi になつていたためであろう。前者には ŋ- を，後者には ň- を推定する。この2者は，百夷文字を中心に考えるならば，補い合う關係にたつているけれども，實際には，この ň- は，つぎに述べる百夷語 ň- と合一していて，ŋ- とは對立した單位であつたと考えられる。百夷語Bには，〈蛇〉鄔「˙-」(285),〈銀〉恩「˙-」(583),〈婦人〉僕影「˙-」(439),〈易しい〉哀「˙-」(682) の例がある。ここでは漢語 n- による表記例は認められない。いずれも ŋ- を推定する。この百夷語 ŋ および ň は，共通タイ語 ŋ および ň または y- に對應する。

〈牙〉　T.C. ŋaa L1 ：百　ŋaa　：M.P. ŋaa 55 ：Shan ŋaa 4

〈蛇〉　T.C. ŋuu L1 ：百　ŋuu　：M.P. ŋuu 55 ：Shan ŋuu 4

〈易しい〉　T.C. ŋaai L2：百　B. ŋaai　：M.P. ŋaai 33 ：Shan ŋaai 3

〈聞く〉　T.C. yin L1 ：百　ňin<ŋin　：M.P. -hin 55 ：Shan ŋin 4

〈婦人〉　T.C. hňiŋ H1：百 A. ňiŋ<ŋiŋ B. ŋiŋ：M.P.　：Shan yiŋ 4

この結果，共通タイ語形 ň-, hň または y- を推定していた形式の中の一部には，もともと *ŋ- であつた形式が含まれていることがわかる。したがつて〈婦人〉は *hŋiŋ H1 に，〈聞く〉は ŋin L1 にその共通形式を改めなければならない。

20.　共通タイ語 ŋ-hŋ- →百夷語 ŋ-, ň-, →現代パイ・イ語 ŋ-h-：シャン語 ŋ-, y-.

XI.　百夷語A. ň-「ň-, y-」：漢語 n-, y-：百夷語 B.「y-」

百夷文字 ň- をもつて書かれた單語には，漢語 n- または y- があてられる。ňaa：ňuw 芽「y-」泥「n-」〈茶〉(161), ňwat 虐「n-」〈芽〉(152), ňaw 虐〈大きい〉(656), ňo pak 細「n-」八〈箒〉(497), ňaa：芽〈草〉(151), ňaa：（ト yaa：）芽〈祖母〉(341), pat ňaŋ 八養「y-」（ト 仰）〈琥珀〉(601). 前者には ň- を，後者には y- を推定する。この ň- は，上述（X）において認めた ň- と同一の音素であり，y- はつぎの百夷文字 y- をもつて書かれた單語に認められる單位と差別のない音素であつたと考えられる。百夷語Bにおいては，これらに對應する單語は，漢語 y- をもつて表記されている。〈茶〉芽以 (546),〈大きい〉要「y-」(674),〈草〉芽 (273),〈祖母〉鴉「y-」(420),〈琥珀〉八央「y-」(592).

これは共通タイ語 ň-, hň-, y- に對應する。

〈芽〉　T.C. ňɔɔt　：百　ňwat　：M.P. zuat 11 ：Shan yɔt 3

〈蚊〉　T.C. ňuŋ L1 ：百　yuŋ<ňuŋ　：M.P. zuŋ 55 ：Shan yuŋ 1

〈大きい〉　T.C. hňai H1：百　ňɯ　：M.P. zaɯ 35 ：Shan yaü 2

〈草〉　T.C. hňa H3 ：百　yaa<ňaa　：M.P. zaa 31 ：Shan yaa 3

〈祖母〉　T.C. ya M3　: 百　yaa<ňaa　: M.P. zaa 31 : Shan yaa 3

21.　共通タイ語 ň-, hň →百夷語 ň-, >y- →現代パイ・イ語 z-: シャン語 y-

〈祖母〉の共通タイ語形式は hňa M3 に改められるべきであろう。

XII. 百夷語 A. y「y-」: 漢語 ʻi-: 百夷語 B.「y-」

百夷文字 y- を用いて書かれた單語は，すべて漢語 ʻi- によつて表記されている。yu 郁「ʻi-」〈有る〉(255), yin 印「ʻi-」〈凉しい〉(85), yam 煙「ʻi-」〈敬う〉(240), yin 印〈筋肉〉(431)　百夷語Bには〈敬う〉煙　の例がある。これらには y- を推定する。百夷語 y- は共通タイ語 y- に對應する。

〈筋肉〉	T.C.	yen M1	: 百	yin	: M.P.	zin 33	: Shan yin 1
〈有る〉	T.C.	yuu M2	: 百	yuu	: M.P.	zuu 11	: Shan yû 2
〈敬う〉	T.C.	yam L1	: 百	yam	: M.P.	zam 55	: Shan yam 1
〈凉しい〉	T.C.	yin L1	: 百	yin	: M.P.	?	: Shan [25]

22.　共通タイ語 y- →百夷語 y- →現代パイ・イ語 z-: シャン語 y-

この原則に例外的に〈痩せる〉T.C. phrɔɔm H1 がある。百夷語 jwam, 現代パイ・イ語 zuam, シャン語 yɔm 1 がこれにあたる。この共通タイ語形式は phrɔɔm～jɔɔm とすべきであろうか。

百夷文字 ŋ- ň- y- と，百夷語音 *ŋ- ň- y- とはつぎの關係にある。

百夷文字 ŋ-	百夷語A ŋ-	ŋ-	百夷語B	ŋ-	(共通タイ語 *ŋ-, hŋ-)
〃	A ň-	ň-			
百夷文字 ň-	百夷語A ň-		百夷語B	ň-	(共通タイ語 *ň-, hň-)
〃	A y-	y-			
百夷文字 y-	百夷語A y-		百夷語B	y-	(共通タイ語 *y-)

XIII. 百夷語A. m「m-」: 漢語 m-: 百夷語B.「m-」

百夷文字 m- を用いて書かれる單語には　例外なく，漢語 m- があてられる。müw 墨「m-」〈手〉(419), mai 埋「m-」〈樹〉(149), mii 米「m-」〈熊〉(217), 抹 mak「m-」〈果物〉(162), mwau 冐「m-」〈新しい〉(650) など。百夷語Bにおいても同樣に，漢語 m- によつて表記される。〈手〉墨 (501),〈樹〉買 (244),〈熊〉謎 (287),〈果物〉抹 (222),〈新しい〉冐 (168). 百夷語A. B. m- の推定には問題がない。これは共通タイ語 m-, hm- B. の三種に對應する。

〈手〉	T.C.	mɨ L1	: 百	mɤ̆	: M.P.	mɯ 55	: Shan mü 4
〈來る〉	T.C.	maa L1	: 百	maa	: M.P.	maa 55	: Shan maa 4
〈樹〉	T.C.	mai L3	: 百	mai	: M.P.	-mai 442	: Shan -mai 5

25) たとえば，この〈凉しい〉のごとく，百夷語 yin は　共通タイ語形 yin L1 に對應するが，現代パイ・イ語やシャン語には對應しない。このような單語がいくつかある。〈凉しい〉は，現代パイ・イ語 kat, シャン語 kat 4.。これは百夷語のたどつた單語形式の入れ替として考えるべきであろうか，あるいは百夷館譯語の作者が，八百語または暹羅語形から受けた類推によるものであるか明らかではない。

〈果物〉 T.C. hmaak : 百 maak : M.P. maak : Shan maak 2
〈熊〉 T.C. hmii H1 : 百 mii : M.P. mii 35 : Shan mii 1
〈新しい〉 T.C. hmaï H2 : 百 mwaɯ : M.P. maɯ 11 : Shan maü 2
〈葉〉 T.C. Baï M1 : 百 mwaɯ : M.P. maɯ 33 : Shan maü 1
〈肩〉 T.C. Baa M2 : 百 A. mwaa B. maa : M.P. maa 11 : Shan -maa 2
〈村〉 T.C. Baan M3 : 百 maan : M.P. maan 31 : Shan maan 3

23. 共通タイ語 m-, hm- →百夷語 m- →現代パイ・イ語 m-: シャン語 m-
24. 共通タイ語 B- →百夷語 m- →現代パイ・イ語 m-: シャン語 m-

XIV. 百夷語 A. n「n-, l-」: 漢語 n-, l- : 百夷語 B.「n-, l-」

百夷文字 n- を用いて書かれた單語には 漢語 n- または l- があてられる。nwan 暖「n-」〈睡る〉(243), nüw 能「n-」〈肉〉(433), nwak 納「n-」〈外〉(675), nii 膩「n-」〈好い〉(652); nwai 賴「l-」〈山〉(42), nin 吝「l-」〈讓る〉(238), niǎ 煉「l-」〈赤い〉(588), nün 楞「l-」〈月〉(6). この l- と n- が〈自由交替形〉であつた可能性は十分あるけれども, nuk 奴「n-」〈鳥〉と luk 六「l-」〈起る〉(245), naŋ 曩「n-」〈皮〉(432) と laŋ 浪「l-」〈鼻〉(401) が初頭音にはつきりとした差別をもち, niǎ 煉「l-」〈赤い〉(588) と liǎ 璉〈旱いた〉(96) の初頭音が差別をもたなかつたという主張の方が正しいであろう。したがつて, 漢語 n- によつて表記された單語には n- を, l- によつて表記された單語には l- を推定する。百夷語Bでは, 〈睡る〉暖 (463), 〈肉〉你 (553), 〈外〉訥 (95) の n- に對して, 〈山〉賴 (51), 〈赤い〉煉 (611), 〈月〉稜 (22) の l- が推定される。百夷語 l-, n- は共通タイ語 n-, hn-, D- に對應する。

〈外〉 T.C. nɔɔk : 百 -nwak : M.P. luak : Shan -nɔk 3
〈睡る〉 T.C. nɔɔn L1 : 百 nwan : M.P. luan 55 : Shan nɔn 4
〈肉〉 T.C. ñïə L3 : 百 A. nɤ̆ B. nɯ : M.P. lɤ̆ 442 : Shan nö 5
〈顔〉 T.C. hnaa H3 : 百 naa : M.P. laa 31 : Shan naa 3
〈鼠〉 T.C. hnuu H1 : 百 nuu : M.P. luu 35 : Shan nuu 1
〈皮〉 T.C. hnaŋ H1 : 百 naŋ : M.P. laŋ 35 : Shan naŋ 1
〈好い〉 T.C. Dii M1 : 百 A. nii B. lii : M.P. lii 33 : Shan lii 1
〈黑い〉 T.C. Dam M1 : 百 lam : M.P. lam 33 : Shan lam 1
〈赤い〉 T.C. Dɛɛŋ M1 : 百 lien : M.P. lieŋ 33 : Shan leŋ 1

25. 共通タイ語 n-, hn- →百夷語 n- →現代パイ・イ語 l-: シャン語 n-
26. 共通タイ語 D- →百夷語 n-. l- →現代パイ・イ語 l-: シャン語 l-

XV. 百夷語A. l「l-」: 漢語 l : 百夷語B.「l-」

百夷文字 l- を用いて書かれる單語には, 漢語 l- があてられる。 lum 倫「l-」〈風〉(19), liŋ 領「l-」〈猿〉(212), lüt 勒「l-」〈血〉(434), lik 力「l-」〈鐵〉(610), lau 勞「l-」〈酒〉(535). 百夷語Bには, 〈風〉倫 (30), 〈猿〉領 (291), 〈鐵〉立「l-」(588), 〈酒〉醪「l-」(550) の例がある, これらに百夷語 l- を推定することには問題がない。またこの l- を上記百夷文字 n- を用いて書かれた l と

同一音素として扱いたい。この百夷語 l- は，共通タイ語 l-, hl- に對應する。

〈風〉 T.C. lom L1 ：百 lum ：M.P. lom 55 ：Shan lom 4
〈猿〉 T.C. liŋ L1 ：百 liŋ ：M.P. liŋ 55 ：Shan liŋ 4
〈背中〉 T.C. hlaŋ H1 ：百 laŋ ：M.P. laŋ 35 ：Shan laŋ 1
〈孫〉 T.C. hlaan H1 ：百 laan ：M.P. laan 35 ：Shan laan 1

27. 共通タイ語 l-, hl- →百夷語 l- →現代パイ・イ語 l-：シャン語 l-

百夷文字 n-l- と百夷語 n-l- との關係はつぎのごとくである。

百夷文字 n ：百夷語 n- n- （共通タイ語 n- hn-）
百夷文字 l ：百夷語 l- } l- （共通タイ語 D-）
百夷語 l- （共通タイ語 l- hl-）

百夷語は，n-l- が自由交替形となる前段階をしめていると考えられる。

XVI. 百夷語A. r「r-, h-」：漢語 l- h- ：百夷語B.「h-」

百夷文字 r をもつて書かれた單語は，一例〈頭〉のほかは，すべて漢語 l- があてられる。rün 倫〈家〉(451), rak 剌〈愛する〉(239), ruu 魯〈耳〉(409), raa 剌〈雪〉(11), ruŋ 隴〈虹〉(18) など。これは當時の漢語に r 音素が存在していなかつたために，それにもつとも近似した l- 音を用いたことに由來するのであつて，これらの單語に l- と對立した r- を推定することには異論がないであろう。しかし，ro 戶「xu」〈頭〉(400)〔〈頭を叩く〉(294)，〈頭を梳く〉(573)，〈胸〉(411)，〈膝〉(425) はいずれも同じ形態素を含む〕には，百夷語形式「huu」を推定することができる。これはシャン系言語のたどつた r->h- の變化が，この單語にもつとも早くおとずれたことを意味していると思う。百夷語Bでは，これらに該當する單語はすでに記したごとくすべて漢語 x- によつて表記されている。〈耳〉戶 (495)，〈家〉狠「x-」也 (341)，〈雪〉哈「x-」(47)，〈頭〉賀「x-」(493)，〈石〉欣「x-」(83) など。百夷語Bには「h-」を推定する。

ここで考察した百夷語A. r-, h- B. h- は共通タイ語 r-, hr- に對應する。

〈家〉 T.C. rïən L1 ：百 A. rɤ̆n B. hɤ̆n ：M.P. hɤ̆n 55 ：Shan hɤ̆n 4
〈知る〉 T.C. ruu L3 ：百 A. ruu B. huu ：M.P. huu 442：Shan huu 5
〈愛する〉 T.C. rak ：百 A. rak ：M.P. hak ：Shan hak 5
〈石〉 T.C. hrin H1 ：百 A. rin B. hin ：M.P. hin 35 ：Shan hin 1
〈頭〉 T.C. hrəu H1 ：百 A. huu B. ho ：M.P. ho 35 ：Shan hō 1

28. 共通タイ語 r- hr- →百夷語A. r-h- B. h- →現代パイ・イ語 h-：シャン語 h-

XVII. 百夷語A. h「h-」：漢語 x- ：百夷語B.「h-」

百夷文字 h- を用いて書かれた單語には，漢語 x があたる。hai 孩「x-」〈泣く〉(235)，han 汗「x-」〈見る〉(220)，han 汗〈鵞鳥〉(182)，hat 歇「x-」〈作る〉(522). 百夷語Bには，〈泣く〉孩 (462)，〈鵞鳥〉漢「x-」(279) の例がある。これらは，上記XVにおいて推定した h- と同一の音素であつたにちがいない。この百夷語 h- は，共通タイ語 h- に對應する。

〈泣く〉 T.C. hai H3 ：百 hai ：M.P. hai 31 ：Shan hai 3

〈鷲鳥〉 T.C. haan H1 : 百 haan : M.P. haan 35 : Shan haan 2
〈見る〉 T.C. han H1 : 百 han : M.P. han 35 : Shan han 1
〈作る〉 T.C. het : 百 het : M.P. het : Shan het

29. 共通タイ語 h- →百夷語 h- →現代パイ・イ語 h-: シャン語 h-

XVIII. 百夷語A. w「w-, v-」: 漢語 ˙u- : 百夷語B.「w, v」

百夷文字 w- をもつて書かれた單語には，漢語 ˙u- または ˙y があてられる。wan 挽「˙u-」〈日〉(5), wii 偉「˙u」(パ 薇)〈扇子〉(502), wan 挽〈甘い〉(548), wii ro 玉「˙y」戸〈頭を梳く〉(576)。百夷語Bには〈日〉挽 (180),〈扇子〉雨「˙y」(388),〈甘い〉腕「˙u-」(568),〈頭を梳く〉裕「˙y」賀 (517) の例がある。〈日〉,〈甘い〉は，現代パイ・イ語形から見て，w よりもむしろ唇齒摩擦音 v を推定した方が妥當であると考えられる。勿論當時の漢語には van 音節がなかつたために，漢語「˙uan」を用いるよりほかはなかつた。百夷語Aの〈梳く〉およびBの〈梳く〉,〈扇子〉にいずれも漢語「˙y」が用いられているのは，形式「vi」の表記を意圖したのであろう。これらには唇齒摩擦音 v̇ を推定する。百夷語 v は共通タイ語 w, hw に對應する。

〈甘い〉 hwaan H1 : 百 vaan : M.P. vaan 35 : Shan waan 1
〈日〉 wan L1 : 百 van : M.P. van 55 : Shan wan 4
〈扇子〉 wii L1 : 百 vii : M.P. vii 55 : Shan wii 4

30. 共通タイ語 w-, hw- →百夷語 v →現代パイ・イ語 v: シャン語 w-

XIX. 百夷語 A. ˙「˙-」: 漢語 ˙ : 百夷語 B.「˙-」

百夷文字 ˙ (擔母音文字) を用いて書かれる單語には，漢語 ˙ があてられる。˙wak 惡「˙-」〈出る〉(231), ˙un 問「˙-」〈溫かい〉(84), ˙aŋ 昂「˙-」〈盆〉(489), ˙iŋ 印「˙-」〈よりかかる〉(329), ˙au 奥「˙-」〈とる〉(263). 百夷語Bには，〈溫かい〉縕「˙-」(20),〈出る〉惡 (15),〈盆〉盎「˙-」(383) の例がある。これらには假りに聲門音 ʔ を推定しておく。百夷語 ʔ は共通タイ語 ʔ に對應する。

〈出る〉 T.C. ʔɔɔk : 百 ʔwak : M.P. ʔuak : Shan ʔok 2
〈とる〉 T.C. ʔau M1 : 百 ʔau : M.P. ʔau 33 : Shan ʔaw 1
〈溫い〉 T.C. ʔun M2 : 百 ʔun : M.P. ʔun 11 : Shan ʔun 2
〈よりかかる〉 T.C. ʔiŋ M1 : 百 ʔin : M.P. : Shan ʔiŋ 1

31. 共通タイ語 ʔ- →百夷語 ʔ- →現代パイ・イ語 ʔ-: シャン語 ʔ-

§13. 以上の手續の結果，百夷語Aには，つぎの21種の單純子音と一つの子音結合を認めることができた。k k' x ŋ, t t' n l, p p' m f, tṣ tṣ' ň s, r, l, h, v, y ʔ, pl- これに對して，百夷語Bには，つぎの20種の單純子音と一つの子音結合があつたと推定される。k k' x ŋ, t t' n l, p p' f m, tṣ tṣ' ň s, h, v, y, ʔ, k'r.

百夷語Bの子音體系は，百夷語Aの子音體系と全般的に並行している。しかし音素數が一つ不足しているのは，百夷語Bには，r 音が認められないからである。

音節中位および末尾の位置にたつ音素の推定

§14. 百夷語の母音および末尾音の體系は，現代パイ・イ語あるいはシャン語の體

系から推察してかなり複雑であつたと思われる。漢語による表記は，たしかに一定の規則性をもつてはいたが，兩言語の音韻體系のもつ差異から必然的に，百夷語の各音素を相互に明瞭に辨別して表記し得たわけではない。しかし，筆者はつぎの操作によつて，當時の百夷語にかなり近い狀態を推測することができると思う。

まず百夷語Aについて，形式 -VC の位置にあらわれる百夷文字および文字連續を整理しなければならない。百夷語Bについては，これと關連して考察する。

-V# a: aa, i, ii, e, u, uu, o, ai, au; -yV# ye, -wV# we, wa, wai, -Vy uy; -Vw üw, aw, iw; -yVw yaw

-Vŋ	-Vn	-Vm	-Vň	-Vk	-Vt	-Vp
aŋ	an	am	aň	ak	at	ap
uŋ	un	um		uk	ut	up
iŋ	in	im		ik	it	ip
üŋ	ün	üm		ük	üt	üp
waŋ	wan	wam		wak	wat	

上記の百夷文字乃至は文字連續によつて書きあらわされた百夷語は，つぎに掲げる明末順天漢語のいわゆる韻母の體系にもとずいて表記されたのである。

əŋ, iŋ, uŋ, iuŋ（通攝），i, ɪ, ər, y（止攝），u, iu（祝攝），ai, iai, uai（蟹攝），ei, uei（疊攝），au, iau（效攝），ɔ, iɔ, uɔ（果攝），a, ia, ua（假攝），ɛ, iɛ, uɛ, iuɛ（拙攝），ən, in, un, iun（臻攝），an, iɛn, uan, iuɛn（山攝），aŋ, iaŋ, uaŋ（宕攝），əu, iəu（流攝）

この中，いくつかの韻母については，初頭音との結合に一定の限定された分配關係をもつている。

§15. つぎに上記の百夷文字を中心に，その音價と表記漢語音との相關關係を考察して，百夷語の諸音素（母音と末尾音およびその分配關係）を推定していきたい。

I. 百夷語A. a:, aa「a」：漢語 a, ɔ ：百夷語B.「a」

百夷文字 a: および aa を用いて書かれた形式は，khra: および khraa を除いては，いずれも漢語 a によつて寫されている。例 ta: 荅「ta」〈眼〉(410), maa 麻「ma」〈馬〉(523), ňaa 芽「ˈia」〈草〉(151) など。これに對して，形式 khra:（〈白鷗〉(177), 〈尋ねる〉(254)）および khraa（〈奴隷〉(368), 〈官舍〉(453)）には，ともに漢語 苛「k'ɔ」があてられる。これは，當時の漢語の標準的な言葉には「k'a」音節が存在しなかつたことに由來するのである。したがつて，この2形式をも含めて，漢語 a によつて表記された百夷語には「aa」を推定する根據は十分である。a: と aa は，そのトネームの相違を表記した傳承的な綴字法であつて，a: が aa に對立する短母音乃至は聲門閉鎖をともなつた母音を表記したものとは考えられない。これに該當する文字が，現代シャン語においても，現代パイ・イ語においても用いられ，aa を表記する文字とは，トネーム以外にはとくに區別されていない。百夷語Bにおいても，それらに對應する單語は，漢語 a によつて表記されている。〈眼〉荅「ta」(404), 〈馬〉馬「ma」(206), 〈草〉芽「ˈia」(273),

〈奴隷〉客刺「k'ra」。したがつて，百夷語Bにも同様に「aa」を推定する。

百夷語 A. B「aa」は，共通タイ語形 aa，現代パイ・イ語 aa，シャン語 aa に對應する。

〈顔〉 T.C. hnaa H3 : 百 「naa」 : M.P. laa 31 : Shan naa 3
〈足〉 T.C. qhaa H1 : 百 「xaa」 : M.P. xaa 35 : Shan k'aa 1
〈眼〉 T.C. taa M1 : 百 「taa」 : M.P. huj taa 33 : Shan hwe 2 taa 1
〈草〉 T.C. hňaa H3 : 百 「jaa」 : M.P. zaa 31 : Shan yaa 3
〈魚〉 T.C. plaa M1 : 百 A.「plaa」B.「paa」: M.P. paa 33 : Shan paa 1

32. 共通タイ語 aa →：百夷語 A•B「aa」→現代パイ・イ語 aa：シャン語 aa

II. 百夷語 A. i, ii「ii」：漢語 i, y ：百夷語 B.「ii」

百夷文字 i# および ii# を用いて書かれる形式には，原則として漢語「i」があてられ，百夷語Bにおいても，それらに對應する單語は漢語「i」によつて表記されている。百夷文字 i# と ii# は，このテキストに關する限り，とくに區別して用いられなかつたものと思われる。例として，A. *ri 李「li」〈長い〉(280), mii 米〈熊〉(217), pii 筆「pi」〈年〉(95), nii 膩〈好い〉(652) など， B.〈長い〉喜「xi」(676),〈年〉比「pi」(161),〈熊〉謎「mi」(287),〈好い〉立「li」などがある。

しかし，wi および wii 音節は この原則に對する例外である。これには，百夷語 A. wi 偉（パリ本 薇）「'uei」〈扇子〉(501), B. 雨「'y」(288); A. wii 玉「'y」〈梳く〉(573), B. 裕「'y」(517) の2例がある。筆者は，さきに〈扇子〉,〈梳く〉ともに，形式「vii」を推定した。當時の漢語には，もちろん「vi」音節が存在しなかつたために，百夷語Aでは，その一つを「'uei」をもつて他の一つを「'y」で表記した。ここで「'y」を用いたのは，その母音が「y」であつたことを意味するのではなく，初頭音の摩擦的な特徴を示めそうとしたためであろうと考えられる。

百夷語「ii」の大部分は，共通タイ語形式 ii，現代パイ・イ語 ii，シャン語 ii に對應する。

〈長い〉 T.C. rii L1 : 百 A. rii B. hii : M.P. ? : Shan hii 4
〈熊〉 T.C. hmii H1 : 百 mii : M.P. mii 35 : Shan mii 1
〈年〉 T.C. pii M1 : 百 pii : M.P. pii 33 : Shan pii 1
〈好い〉 T.C. Dii M1 : 百 nii : M.P. lii 33 : Shan lii 1
〈扇子〉 T.C. wii L1 : 百 vii : M.P. vii 55 : Shan wii 4

33. 共通タイ語 ii →百夷語 ii →現代パイ・イ語 ii：シャン語 ii

III. 百夷語 A. e, ye「ie」：漢語 ie ：百夷語 B.「ie」

百夷文字 -e には，漢語 i あるいは iɛ があてられる。1) cau ye khau 招以「'i」粊〈米倉管理官〉(381), ye pu 以布〈ふくさ〉(578), me 米〈妻〉(348); 2) me セ「miɛ」〈母〉(343), pe 別「piɛ」〈羊〉(211), the 貼「t'iɛ」〈錢〉(630), te 揲「tiɛ」〈眞實〉(287), mai pe 埋別「piɛ」〈松〉(120)。一方百夷文字 -ye をもつて書かれた單語にも同様に，漢語「iɛ」があたえられている。kye 結「kiɛ」〈少い〉(286), sye lik 謝力「sie」〈鎖〉(506), suk sye 素謝〈洗う〉(252), pat

sye 八謝〈掃除する〉(325) などに認められる附屬語 -sye〈…し終る〉wan phre lye 玩撇列〈楪〉(482).

當時の漢語では，ɛ と iɛ は對立した形式であつた。したがつて，百夷文字 me を用いて書かれた百夷語形式が「miɛ」ではなく，「mɛ」であつたならば，漢語 墨「mɛ」を用いてこの形式を表記していたであろう。しかし，實際には セ「miɛ」が用いられている。同樣に pe に對して，漢語 百 あるいは 白「pɛ」を用いずに，別「piɛ」によつて表記していることは，百夷文字面では，-e および -ye の書き分けを保存していたけれども，實際には百夷語において，-e と -ie の對立がなかつたことを意味している。したがつてこの系列に屬する漢語「-iɛ」をもつて表記された百夷語にはすべて「-ie」を推定する。同じ論據から，百夷語「mie」〈母〉と漢語 '米' につて表記された〈妻〉「mi」とは對立した形式をもつていたことも明らかである。同樣に，漢語 '以' によつて表記された〈倉庫〉には「yi」を，〈ふくさ〉には「yi-pu」を推定しなければならない。そしてこの「-i」は，上記 2) において認めた「-i」とは，同一の音素に屬するものと考えたい。百夷語Bには，〈妻〉米のほかに，〈松〉買別 (249)，〈少い〉結 (408)，〈皿〉撇「p'iɛ」(382)，〈倉〉也「'iɛ」(344) の例があつて，いずれも漢語「iɛ」によつて表記されている。これらにも「-i」および「-iɛ」を推定する。

この系列に屬する百夷語「-i」には，共通タイ語 iə，現代パイ・イ語 ie，シャン語 ě が對應する。

〈倉〉 T.C. yiə L1<ŋiə : 百 yi : M.P. ? : Shan yě 4
〈妻〉 T.C. miə L1 : 百 mi : M.P. mie 55 : Shan mě 4

百夷語 ie は，共通タイ語 ɛɛ，現代パイ・イ語 ie，シャン語 ě, è に對應する。

〈母〉 T.C. mɛɛ L2 : 百 mie : M.P. mie 11 : Shan mè 3
〈羊〉 T.C. bɛɛ L1 : 百 pie : M.P. pie 31 : Shan pè 5
〈眞實〉 T.C. dɛɛ L3 : 百 tie : M.P. tie 33 : Shan ?
〈少い〉 T.C. kɛɛ M2 (?) : 百 kie : M.P. ? : Shan kě 2
〈皿〉 T.C. phrɛɛ H1 : 百 phie : M.P. p'ie 35 : Shan p'è 1

例外として，つぎの單語がある。

〈茄子〉 T.C. (hmaak) khrïə H1 : 百夷 mak k'ie (155).

34. 共通タイ語 iə (一部) →百夷語 ii →現代パイ・イ語 ie: シャン語 ě
35. 共通タイ語 ɛɛ →百夷語 ie →現代パイ・イ語 ie: シャン語 ě, è
36. 共通タイ語 ïə (一部) →百夷語 ie → ? : ?

IV. 百夷語 A. u, uu「uu」: 漢語「u」: 百夷語 B.「uu」

百夷文字 u および uu によつて書かれた單語には，漢語 u があてられる。例として nu 奴「nu」〈ねずみ〉(213)，puu 布「pu」〈かに〉(189)，ŋuu 午「'u」〈蛇〉(193)，khruu 庫「k'u」〈橋〉(468)，thuu 禿「t'u」〈豆〉(167) などがある。百夷文字 u と uu の使い分けには，實際には區別がなかつた。少くとも短母音と長母音を代表する性質のではなかつたと考えられる。百夷語Bにおいても，こ

れらの單語は同樣に漢語 u をもつて表記されている。〈ねずみ〉怒「nu」(277), 〈かに〉補「pu」(329), 〈蛇〉鄔「'u」(285), 〈橋〉庫「k'u」(65)。 したがつて, 百夷語A. B. 共に「uu」を推定する。

百夷語 uu は, 共通タイ語 uu および əu に對應し, 前者の系列は現代パイ・語uu, シャン語 uu に, 後者の系列は 現代パイ・イ語 o, シャン語 o にあたる。

〈ねずみ〉	T. C.	hnuu H1	: 百	nuu	: M. P.	luu 35	: Shan	nû 1
〈かに〉	T. C.	puu M1	: 百	puu	: M. P.	puu 33	: Shan	pû 1
〈蛇〉	T. C.	ŋuu L1	: 百	ŋuu	: M. P.	ŋuu 55	: Shan	ŋû 4
〈橋〉	T. C.	khrəu H1	: 百	k'uu<k'ruu	: M. P.	xo 35	: Shan	k'ō 1
〈豆〉	T. C.	thəu H2	: 百	t'uu	: M. P.	t'o 11	: Shan	t'ō 4
〈笑う〉	T. C.	khrəu H1	: 百	k'uu<k'ruu	: M. P.	xo 35	: Shan	k'ō 1

37. 共通タイ語 uu →百夷語 uu →現代パイ・イ語 uu: シャン語 û

38. 共通タイ語 əu →百夷語 uu →現代パイ・イ語 o : シャン語 ō

V. 百夷語 A. o「o, wo」: 漢語 ɔ, uɔ : 百夷語 B.「o, wo(?)」.

百夷文字 o を用いて書かれる百夷語は, 漢字表記の面から, つぎの3種類に分けられる。1) ɔ: mo 磨「mɔ」〈鍋〉(487), nam mo 喃磨〈井戸〉(40), po 孛「pɔ」〈父〉(342), po 孛〈打つ〉(268), kho 賀「xɔ」〈たかどの〉(447), mai o 埋俄「ɔ」〈蠆〉(115). 2) uo: ko siw 果「kuɔ」酋〈朋友〉(363), co 卓「tʂuɔ」〈匙〉(483), tak lo 荅羅「luɔ」〈ばつた〉(201), to khiŋ 朶「tuɔ」悻〈獨身〉(397). 3) u, ro 戶「xu」〈頭〉(400).

最後の〈頭〉を意味する單語は, 百夷文字 ro をもつて書かれているけれども, その漢字表記から推察すると, 實際には上記 u の系列に屬すべき形式をもつていたと考えられた。事實〈頭〉は, 共通タイ語 hrəu H1, 現代パイ・イ語 ho 35, シャン語 hō 1 に對應し, 上記〈橋〉, 〈笑う〉, 〈豆〉などと並行する形式であつた。これに對して百夷語Bでは, 〈頭〉は, 賀「xɔ」をもつて表記されている。したがつて, 〈頭〉百夷語A.「hu」, B.「ho」を推定する。さて, 上記1)に屬する漢語 ɔ によつて表記される形態素と, 2)に屬する漢語 uɔ による形態素とは, 百夷語Aにおいて辨別されるべき形式をもつていたであろうことはつぎの點から推察することができる。當時の漢語においては, たとえば kɔ 哥 と kuɔ 果, lɔ 絡 と luɔ 羅 のように ɔ と uɔ の對立した形式が存在していた。それ故, 百夷語の形式がもし kɔ, lɔ であつたならば, 哥絡を用いて表記したにちがいない。しかし, 實際には kuɔ, luɔ を用いている。したがつて, 2)の系列に屬する百夷語形式は uɔ であつたと推定してよい。同樣に, 漢語において對立していた ɔ 俄, および uɔ 訛の中, ɔ の方を選擇して百夷語〈蠆〉を表記しているために, 1)の系列は「ɔ」であつた。この「ɔ」と「wɔ」の對立は, 現代シャン語の「ō」と「o」の對立に對應するものと考えられる。百夷語Bには, 〈鍋〉磨 (380), 〈父〉波「pɔ」(421), 〈打つ〉跛「pɔ」(476) の例がある。これらには, いずれも「o」を推定する。この言語には, o と wo の對立があつたか否かはこの例のみからは明らかではない。百夷語「o」は, 共通タイ語

形ɔから來源しているけれども，「wo」に對應する共通タイ語形は明確ではない。

〈鍋〉 T.C. hmɔɔ H3：百 mo ：M.P. mo 31 ：Shan mō 3

〈井戸〉 T.C. bɔɔ M2 ：百 nam mo：M.P. nam mo 11：Shan nam 5 mō 2

〈父〉 T.C. bɔɔ L2 ：百 po ：M.P. po 31 ：Shan pō 3

〈蘆〉 T.C. 'ɔɔ L3 ：百 mai ɔ ：M.P. ? ：Shan mai ō 3

〈朋友〉 T.C. kləə M1：百 kwo – ：M.P. – ko 31 ：Shan ko 5 –

〈匙〉 T.C. cəə M1 ? ：百 tʂwo ：M.P. ：Shan so 5

39. 共通タイ語 ɔɔ →百夷語 o →現代パイ・イ語 o：シャン語 ō

40. 共通タイ語 əə →百夷語 wo →現代パイ・イ語 o：シャン語 o

VI. 百夷語 A. ai「ai, aai」：漢語 ai ：百夷語 B.「ai, aai」

百夷文字 ai によつて書かれた百夷語には，漢語 ai があてられる。例 kai 盖「kai」〈鷄〉(183), khai 害「xai」〈賣る〉(274), pai 拜「pai」〈行く〉(247), nai 乃「nai」〈露〉(16), mai 埋「mai」〈木〉(149), kam sai 幹賽「sai」〈左〉(640), sai 賽「sai」〈腸〉(414), tai 歹「tai」〈死ぬ〉(301) など。百夷語Bにおいても同樣である。〈鷄〉盖 (317),〈露〉乃 (41),〈歩く〉拜 (475),〈泣く〉孩「xai」(462),〈木〉買「mai」(248),〈左〉干洒「sai」(655) など。

この系列は 現代パイ・イ語，シャン語および共通タイ語形の ai および aai に對應する。この短母音と長母音の對立は，タイ諸語一般に認められるけれども當時の漢語には，この兩者を明確に區別して表記し得る手段がなかつた。したがつて，百夷語においても，ai および aai の對立を推定しても不都合ではないであろう。上例については〈鷄〉,〈行く〉,〈木〉,〈腸〉,〈泣く〉は ai であり，〈賣る〉,〈露〉,〈左〉,〈死ぬ〉は aai であつたと考えられる。

〈鷄〉 T.C. kai M2 ：百 kai ：M.P. kai 11 ：Shan kai 2

〈木〉 T.C. mai L3 ：百 mai ：M.P. mai 442 ：Shan mai 5

〈腸〉 T.C. sai H3 ：百 sai ：M.P. sai 31 ：Shan sai 3

〈賣る〉 T.C. qhaai H1：百 xaai ：M.P. xaai 35 ：Shan k'aai 1

〈左〉 T.C. zaai L3 ：百 saai ：M.P. -saai 442：Shan -saai 5

〈死ぬ〉 T.C. taai M1 ：百 taai ：M.P. taai 33 ：Shan taai 1

41. 共通タイ語 ai →百夷語 ai →現代パイ・イ語 ai ：シャン語 ai

42. 共通タイ語 aai →百夷語 aai →現代パイ・イ語 aai：シャン語 aai

VII. 百夷語 A. wai「wai」：漢語 ai, uai ：百夷語 B.「wai」

百夷文字 wai を用いて書かれる單語には，漢語 ai または uai があてられる。例として 1) nwai 賴「lai」〈山〉(42), khwam thwai 緩臺「t'ai」〈事務〉(250), me nwai 米乃「nai」〈妾〉(349). 2) khrwai 壞「xuai」〈螺〉(191), nam wwai 喃歪「'uai」〈沙糖〉(537) などがある。

當時の漢語には「luai」「t'uai」「nuai」の音節は存在していなかつたために，1)2)共に百夷語「wai」の表記を意圖したものと考えられる。百夷語Bの〈山〉賴 (51),〈妾〉米乃 (436) にもこれと並行して，「lwai」「nwai」を推定したい。

百夷語 wai は，共通タイ語形 ɔɔi，現代パイ・イ語 uai，シャン語 oi に對應する。

〈山〉	T. C. Dɔɔi M1	: 百 lwai	: M. P. luai 35 : Shan loi 1
〈事務〉	T. C. thɔɔi H3	: 百 -t'wai	: M. P. : Shan -t'oi 3
〈小さい〉	T. C. nɔɔi L3	: 百 nwai	: M. P. : Shan noi 5
〈貝螺〉	T. C. hɔɔi H1	: 百 xwai	: M. P. huai 35 : Shan hoi 1
〈甘蔗汁〉	T. C. -'ɔɔi L3	: 百 -wai	: M. P. ? : Shan -oi 3

43. 共通タイ語 ɔɔi →百夷語 wai →現代パイ・イ語 uai：シャン語 oi.

VIII. 百夷語 A. kwai「wei」：漢語 ueɪ ：百夷語 B.「wei」

百夷文字 kwai によつて書かれている〈芭蕉〉を意味する單語には，漢語 桂「kuei」があてられる (105)。これに對應する百夷語 B も同樣に 歸「kuei」である。當時の漢語においては，kuai（たとえば怪乖など）と kuei（桂，歸など）は對立した形式をなしていた。ここで百夷語〈芭蕉〉を漢語 kuei によつて表記している以上，百夷語形式は kuai ではなくて，kuei であつたにちがいない。「kuei」は共通タイ語形式 kluey M3 に對應する。

44. 共通タイ語 kluey →百 kwei →現代パイ・イ語 ? ：シャン語 ?.

IX. 百夷語 A. au, aw「au, aaw」：漢語 au ；百夷語 B.「aw, aaw」

百夷文字 au および aw を用いて書かれる單語は，漢語 au によつて表記される。例 cau 招「tṣau」〈早い〉(91)，lau 勞「lau」〈酒〉(535)，au 奥「'au」〈娶る〉(303)，naw 閙「nau」〈星〉(8)，taw 到「tau」〈龜〉(187)，aw 奥〈叔父〉(354)，thaw cit 陶「t'au」只〈藤〉，naw 閙〈寒い〉（ト，nwaw）(78) など。百夷語Bにおいても同樣である。〈早い〉爪「tṣau」(141)，〈酒〉醪「lau」(550)，〈星〉澇「lau」(27)，〈寒い〉閙 (143).

これらは，共通タイ語形 au および aaw の2系列に對應する。すなわち，〈早い〉，〈酒〉，〈娶る〉，〈龜〉，〈藤〉は au に，〈星〉，〈叔父〉は aaw にあたる。この短母音と長母音の對立は，タイ諸語一般に保持されているから，百夷語にも aw および aaw を認めて差支えないであろう。

〈早い〉	T. C. ʂau L3	: 百 tṣau	: M. P. tsau 442 : Shan sau 5
〈酒〉	T. C. hlau H3	: 百 lau	: M. P. lau 31 : Shan lau 3
〈主人〉	T. C. cau M3	: 百 tṣau	: M. P. tsau 31 : Shan sau 3
〈星〉	T. C. Daaw M1	: 百 naaw	: M. P. laaw 33 : Shan laaw 1
〈伯父〉	T. C. ʔaaw L1	: 百 ʔaaw	: M. P. ʔaaw 33 : Shan -aaw 1

45. 共通タイ語 au →百夷語 au →現代パイ・イ語 au ：シャン語 au.

46. 共通タイ語 aaw →百夷語 aaw →現代パイ・イ語 aaw：シャン語 aaw.

X. 百夷語 A. wau「wau」：漢語 au ：百夷語 B. au? wau?.

百夷文字 wau をもつて書かれる單語には，上記系列 IX と區別なく，漢語 au があてられている。例として，百夷語A. twau 刀「tau」〈壺〉(485)，pwau 砲「p'au」（袍「pau」の誤寫？）〈吹く〉(328)，kwau 高「kau」〈舊い〉(651)，khwau 毫「xau」〈角〉(613)，khwau 毫〈入る〉(232) など。百夷語 B.〈壺〉

刀 (385), 〈吹く〉 **梍**「pau」(31), 〈舊い〉 告「kau」(167), 〈角〉 浩「xau」(333) などがある。

當時の漢語には uau という形式は存在しなかつた。したがつて，この漢字表記から，百夷語形式が au であつたか wau であつたかを決定することはできない。これらの單語は共通タイ語 au, 現代パイ・イ語 aw, シャン語 au に對應する。また，それに對應する形式が wau であるタイ語方言は，未だ報告されてはいない。しかし，ここでは，かりに百夷文字における書きわけを重視して，これらに -wau を推定する。

〈舊い〉	T.C. kau M2	: 百 kwau	: M.P. kau 11	: Shan kau 2
〈吹く〉	T.C. pau M2	: 百 pwau	: M.P. pau 11	: Shan pau 2
〈入る〉	T.C. qhau H3	: 百 xwau	: M.P. xau 31	: Shan k'au 3
〈壺〉	T.C. tau M3	: 百 twau	: M.P. tau 31《瓶》	: Shan tau 3
〈角〉	T.C. qhau H1	: 百 xwau	: M.P. xau 35	: Shan k'au 1

47. 共通タイ語 au →百夷語 wau →現代パイ・イ語 au: シャ語 au.

XI. 百夷語 A. wau「aɯ」, au「ɤ」 : 漢語 au : 百夷語 B.「aɯ」

百夷文字 wau または au によつて書かれる單語には，別に一つの系列がある。それには 1) mwau 茂「mau」〈葉〉(148), mwau 茂〈新しい〉(650), twau 刀「tau」〈下〉(645), kwau 高「kau」〈近い〉(661), swau 騷「sau」〈淸い〉(668) の漢語「au」をもつて表記される單語と，2) ňau 虐「niuɛ」〈大きい〉(656), khrau cau 克「k'ɛ」(ト 客「k'ɛ」) 遮「tsɛ」〈思う〉(223), cau 遮〈心〉(412) の「uɛ」または「ɛ」によつて表記される單語が屬する。これは，共通タイ語 aï, 現代パイ・イ語 aɯ, シャン語 aü に對應する系列であつて，上記 IX および X とははつきりと辨別されていたにちがいない。筆者は，1)に屬する單語には「aɯ」を，2)に屬する單語には，「ɤ」を推定したい。「ɤ」については，系列 XII において考察する。百夷語Bでは，〈下〉干刀 (670), 〈新しい〉胃「mau」, 〈大きい〉要「'iau」(674), 〈心〉招「tsau」(505) のごとくいずれも漢語 au によつて表記されている。これらには，「taɯ」, 「maɯ」, 「yaɯ」, 「tsaɯ」を推定する。

〈樹の葉〉	T.C. Baï M1	: 百 mwaɯ	: M.P. maɯ 33	: Shan maü 1
〈下〉	T.C. taï M3	: 百 twaɯ	: M.P. taɯ 31	: Shan taü 3
〈近い〉	T.C. klaï M3	: 百 kwaɯ	: M.P. kaɯ 31	: Shan kaü 3
〈大きい〉	T.C. hňaï H2	: 百 A. ňɤ B. yaɯ	: M.P. zaɯ 22	: Shan yaü 2
〈心〉	T.C. tšaï M1	: 百 A. tsɤ B. tsaɯ	: M.P. tsaɯ 33	: Shan saü 1
〈思う〉	T.C. Graï L2	: 百 A. k'ɤ B. tsaɯ	: M.P. xaj 31	: Shan k'aü 3 saü 1
			<xaɯ-tsaɯ 33:	~k'ai saü

ちなみに，蓮山擺夷語では，〈新しい〉 mɯ 35, 〈近い〉 kɯ 31, 〈大きい〉 jɯ 13, 〈心〉 tsɯ 33, 〈思う〉 xɯ 53 であつて，百夷語 A の一部と並行した aɯ から ɯ への變遷が認められる。

48. 共通タイ語 aï →百夷語A. waɯ, ɤ, B. aɯ→現代パイ・イ語 aɯ: シャン語 aü.

XII. 百夷語 A. üw「ɯ, ɤ」 : 漢語 i, ɛ : 百夷語 B.「ɯ, ɤ」.

百夷文字 üw を用いて書かれる單語には，漢語 ɛ あるいは i があてられる。1) nüw 能「nɛ」〈肉〉(433), kam nüw 幹能〈上〉(644), tüw rɔ 得「tɛ」戸〈叩頭〉(294), küw 革「kɛ」〈鹽〉(528), süw 色「sɛ」〈買う〉(273); 2) ňa: nüw 芽泥「ni」〈茶〉(161), cüw 知「tṣi」〈名前〉(60) など，百夷語Bにおいても，同樣に，1)〈鹽〉革 (526),〈叩頭〉得賀 (489) の ɛ に對して，2)〈肉〉你「ni」(553),〈上〉膩「ni」(55),〈買う〉司「si」(273) の i による表記例がある。この漢字表記は，後舌張唇母音「ɤ」および「ɯ」を意圖したものであろう。ここで，ɛ および i を用いたのは，この種の漢語に存在しない音を表記するにあたつて，前舌母音と後舌母音の對立よりも，張唇母音と圓唇母音の對立を重要視した結果であると考えられる。これらの形式は，共通タイ語 ïə および ï，現代パイ・イ語 ɤ および ɯ，シャン語 ö および ü に對應する。しかし，それらと百夷語との對應關係は，必ずしも嚴密に並行しているわけではない。上掲例の中では，〈肉〉,〈上〉,〈叩頭〉,〈鹽〉は，共通タイ語 ïə に，〈買う〉,〈茶〉,〈名前〉は ï に對應する。これは，百夷語自體に混合が生じていたのではなく，この種の音聲を音素としない當時の漢人の不正確な記述に由來する可能性が大きい。

〈肉〉	T. C. nïə L3	: 百 A. nɤ B. nɯ	: M. P. lɤ 442	: Shan nö 5
〈上方〉	T. C. hnïə H1	: 百 A. nɤ B. nɯ	: M. P. lɤ 35	: Shan nö 1
〈鹽〉	T. C. klïə M1	: 百 A, B. kɤ	: M. P. kɤ 33	: Shan kö 1
〈買う〉	T. C. zï L3	: 百 A. sɤ B. sɯ	: M. P. sɯ 442	: Shan sü 5
〈名前〉	T. C. ǰï M3	: 百 A. tṣɯ	: M. P. tsɯ 31	: Shan sü 3

49. 共通タイ語 ïə →百夷語A. ɤ, B. ɤ, ɯ →現代パイ・イ語 ɤ : シャン語 ö.
50. 共通タイ語 ï →百夷語A. ɤ, ɯ B. ɯ →現代パイ・イ語 ɯ: シャン語 ü.

XIII. 百夷語 A. yaw「iəu」 : 漢語 iəu : 百夷語 B.「iəu」

百夷文字 yaw をもつて書かれる單語には，漢語 iəu があてられる。例 khyaw 嗅「xiəu」〈青い〉(582), khyaw 嗅「xiəu」〈齒〉(408), yyaw 憂「'iəu」〈憂う〉(224), mak lyaw 抹留「liəu」〈橘〉(132). 百夷語Bにおいても，〈青い〉嗅〈齒〉求「k'iəu」(499) の例がある。これらには「iəu」を推定することができる。

百夷語「iəu」は 共通タイ語 iəu, 現代パイ・イ語 iu, シャン語 ĭō に對應する。

〈青い〉	T. C. qhiəu H1	: 百 xiəu	: M. P. xiu 35	: Shan k'ĭō 1
〈齒〉	T. C. qhiəu H3	: 百 xiəu	: M. P. xiu 31	: Shan k'ĭō 3

51. 共通タイ語 iəu →百夷語 iəu →現代パイ・イ語 iu: シャン語 ĭō.

XIV. 百夷語 A. iw「iw」 : 漢語 iəu : 百夷語 B. ?

百夷文字 iw をもつて書かれた單語は kɔ siw 果酋「ts'iəu」〈朋友〉(363) および siw 酋〈捕捉する〉(271) の 2 單語である。當時の漢語には音節形式 siu が存在しなかつたために，漢語 '酋' が百夷語「siu」を表記したのか「siəu」を表記したのかを決定することができない。〈朋友〉siw は 共通タイ語形 siəu H2 に對應していて，上記の XIII の系列に屬するべき單語である。しかし，この綴字 siw

が生れたのは，「siəu」が「siu」に變化した結果にちがいない。これには百夷語「iw」を認めるべきであろう。しかし，この「iw」が上記の「iəu」と辨別されるべき音素であつたか，あるいはそれと自由交替形であつたかを決定することはむつかしい。百夷語Bには，これに該當する單語は認められない。

〈朋友〉　T.C. siəu H2 : 百 siw : M.P. ? : Shan sè 3

〈とらえる〉 T.C. siəu(?) : 百 siw : M.P. siau 31 : Shan ?

52. 共通タイ語 iəu →百 iw →現代語パイ・イ語 iau: シャン語 è.

XV. 百夷語 A. uy「uy?」 : 漢語 ei, uei : 百夷語 B. ui?

百夷文字 uy を用いて書かれる單語には，漢語 ei または uei があてられる。例 muy 昧「mei」〈霜〉(12), ruy〔luy の誤〕雷「lei」〈したがう〉(272), nwai ruy 賴雷〈嶺〉(51), luk khuy 六奎「k'uei」〈女婿〉(359); 百夷語 B.〈霜〉昧 (40),〈婿〉愧「k'uei」陶 (431). 當時の漢語には，lwei, mwei および k'ei はなかつた。また -ui も認められない。したがつて，この百夷語形式はよくわからない。ここではかりに百夷文字と現代パイ・イ語シャン語との對應關係から，百夷語 A, B ともに「-ui」を推定する。東洋文庫本では〈したがう〉は nüy と書かれていて，-uy と üy は，實際には差別がなかつたらしい。それ故に man küy 蠻圭「kuei」〈布〉(568) B.〈布〉把歸「kuei」(539) もこの系列に屬する單語であると考えられる。この「kui」は〈木棉〉の意味である。百夷語 ui には，共通タイ語形 ei，現代パイ・イ語 -uj, -oj, シャン語 we, wī が對應する。

〈霜〉　T.C. mei(?) : 百 mui : M.P. muj 35 : Shan mwe 1

〈婿〉　T.C. khei H1 : 百 k'ui : M.P. : Shan k'we 3

〈したがう〉 T.C. lei(?) : 百 lui : M.P. : Shan lwe 4

〈谷〉　T.C. rei(?) : 百 rui : M.P. hoj 31 : Shan hwe 3

〈木棉〉　T.C. kei(?) : 百 kui : M.P. kuj 33 : Shan kwī 1

53. 共通タイ語 ei →百夷語 ui →現代パイ・イ語 -uj, -oj: シャン語 we, wī.

XVI. 百夷語 A. waa「waa」 : 漢語 ua : 百夷語 B.「waa」

百夷文字 waa を用いて書かれる單語には，漢語 ua があてられる。kwaa 掛「kua」〈行く〉(248), kam khwaa 幹化「xua」〈右〉(641). B.〈右〉干化 (656).

これには「waa」を推定する。パリ本の phaa nin 法吝〈土塀〉(46), phraa sye 怕謝〈ぬけ去る〉(264) が，東洋文庫本ではそれぞれ phwa: nin, phwaa sye となるのは，〈犬〉,〈肩〉などと並行した東洋文庫本がもとずいた言語の方言的變種であろう。百夷語 waa は，共通タイ語 waa，現代パイ・イ語 aa，シャン語 waa に對應する。

〈行く〉 T.C. kwaa M2 : 百 kwaa : M.P. kaa 11 : Shan kwaa 2

〈右〉　T.C. qhwaa H1 : 百 xwaa : M.P. xaa 35 : Shan k'waa 1

54. 共通タイ語 waa →百夷語 waa →現代パイ・イ語 aa: シャン語 waa.

XVII. 百夷語 A. aŋ「aŋ, aaŋ」 : 漢語 aŋ : 百夷語 B.「aŋ, aaŋ」

百夷文字 aŋ をもつて書かれた單語には，例外なく漢語 aŋ があてられる。kaŋ

扛「kaŋ」〈石弓〉(518), caŋ 章「tṣaŋ」〈象〉(614), taŋ 黨「taŋ」〈道〉(39), phaŋ nam 放喃「faŋ」〈岸〉(49), paŋ tai 邦歹「paŋ」〈兎〉(208), pha laŋ 法浪「laŋ」〈雷〉(3), laŋ 浪〈背中〉(416), naŋ 曩「naŋ」〈皮〉(432), maŋ 忙「maŋ」〈薄い〉(659) などの例がある。

百夷文字の組織には 長がい aaŋ と短かい aŋ を書きわける手段がなかつた。その上，當時の漢語においても，同様に長母音と短母音の對立が認められない。しかし，この對立が百夷語において音韻論的意義をもつていたであろうことは，現代パイ・イ語，シャン語の對應形式から十分推察することができる。百夷語自體においても，共通タイ語形 ɔŋ および ɔɔŋ に對應する系列を uŋ および waŋ として保持している事實がこの推定を支持するであろう。上掲〈石弓〉から〈兎〉までが長がい aaŋ であり，〈雷〉から〈坐る〉までは短かい aŋ であつたと考えられる。百夷語Bに對しても同様に，〈石弓〉杠→「kaaŋ」(407)，〈象〉掌→「tṣaaŋ」(294)，〈道〉黨→「taaŋ」(70)，〈兎〉邦歹→「paaŋ tai」(278)；〈雷〉法浪→「faa laŋ」(3)，〈背中〉浪→「laŋ」(416)，〈皮〉曩→「naŋ」(432). の諸形式を推定するのが妥當である。この系列は，共通タイ語 aŋ, aaŋ, パイ・イ語 aŋ, aaŋ, シャン語 aŋ, aaŋ に對應する。

〈背中〉	T. C. hlaŋ H1	: 百 laŋ	: M. P. laŋ 35	: Shan laŋ 1
〈雷〉	T. C. -ɒaŋ M1	: 百 -laŋ	: M. P. -laŋ 33	: Shan -laŋ 1
〈憎む〉	T. C. ǰaŋ L1	: 百 tṣaŋ	: M. P. tsaŋ 55	: Shan saŋ 4
〈象〉	T. C. ǰaaŋ L3	: 百 tṣaaŋ	: M. P. tsaaŋ 442	: Shan saaŋ 5
〈道〉	T. C. daaŋ L1	: 百 taaŋ	: M. P. taaŋ 55	: Shan taaŋ 4
〈薄い〉	T. C. ʙaaŋ M1	: 百 maaŋ	: M. P. maaŋ 33	: Shan maaŋ 1

55. 共通タイ語 -aŋ →百夷語 -aŋ →現代パイ・イ語 -aŋ : シャン語 -aŋ.
56. 共通タイ語 -aaŋ →百夷語 -aaŋ →現代パイ・イ語 -aaŋ: シャン語 -aaŋ.

XVIII. 百夷語 A. an「an, aan」 : 漢語 an : 百夷語 B.「an, aan」

百夷文字 an を用いて書かれる單語には，漢語 an があてられる。例 han 汗「xan」〈見る〉(220), han 汗〈鷲鳥〉(182), wan 挽「'uan」〈甘い〉(548), man na: 蠻那〈村〉(52), phan 反「fan」〈夢〉(244), phan 反〈(吠える)鹿〉(214), khran 勘「k'an」〈怠惰な〉(318).

この系列においても，上記 aŋ の場合と同じく，實際には an および aan の對立が意味の區別をになつていたものと推定される。上例については，〈見る〉「han」に對して，〈鷲鳥〉は「haan」であり，〈夢〉は「fan」であるのに對して，〈(吠える) 鹿〉は「faan」であつたにちがいない。百夷語Bにおいても同様に〈夢〉泛「fan」(464)→「fan」，〈(吠える)鹿〉反 (288)→「faan」，〈村〉蠻 (107)→「maan」，〈甘い〉腕「uan」(568)→「waan」，〈鷲鳥〉漢 (279)→「haan」の諸例があつて，an および aan の對立を認めるべきであろう。

〈見る〉	T. C. han H1	: 百 han	: M. P. han 35	: Shan han 1
〈夢〉	T. C. fan H1	: 百 fan	: M. P. fan 35	: Shan p'an 1

〈甘い〉 T.C. hwaan H1 ：百 vaan ：M.P. vaan 35 ：Shan waan 1
〈村〉 T.C. Baan H3 ：百 maan ：M.P. maan 31 ：Shan maan 3
57. 共通タイ語 -an →百夷語 -an →現代パイ・イ語 -an ：シャン語 -an.
58. 共通タイ語 -aan →百夷語 -aan →現代パイ・イ語 -aan：シャン語 -aan.

XIX. 百夷語 A. am「am, aam」：漢語 an ：百夷語 B.「am, aam」

百夷文字 am をもつて書かれる單語には，初頭に y- をもつ音節以外は，漢語 -an があてられる。nam 爛「lan」〈黑い〉(595)，kham 酣「k'an」〈晩〉(92)，tham 嘆「t'an」〈問う〉(227)，kam 幹「kam」〈紫〉(586).

當時の漢語には，音節末尾の鼻音は -n および -ŋ の對立のみが認められたから，百夷語の -m を -ŋ, -n から辨別して表記することができなかつた。したがつて，現代パイ・イ語においても，シャン語においても，またタイ諸語一般に -m が -n, -ŋ とはつきりした對立をしめしている事實にもとずいて，百夷語にも -m を推定することは妥當である。その上，この系列にも，實際には，am と aam の對立があつた。上例〈黑い〉,〈晩〉,〈紫〉は am,〈問う〉は aam である。百夷語Bにおいても，〈黑い〉爛 (613)→「lam」,〈晩〉憨「k'am」(142)→「k'am」,〈金〉罕「xan」(574)→「xam」, に對して〈三〉散「san」→「saam」(621) を認めるべきである。形式 yam をもつ單語には，漢語 '煙'「iɛn」があてられる。例として〈敬う〉(240),〈濕る〉(98) がある。この表記は漢語には音節 yan が存在しなかつたことに由來するのであつて，百夷語形式 yem を表記したのではない。

〈黑い〉 T.C. Dam M1 ：百 lam ：M.P. lam 33 ：Shan lam 1
〈晩〉 T.C. Gam L2 ：百 xam ：M.P. xam 33 ：Shan k'am 3
〈問う〉 T.C. thaam H1 ：百 t'aam ：M.P. t'aam 35 ：Shan t'aam 1
〈三〉 T.C. saam H1 ：百 saam ：M.P. saam 35 ：Shan saam 1
〈濕る〉 T.C. yam L1 ：百 yam ：M.P. zam 55 ：Shan yam 4
59. 共通タイ語 am ：百夷語 -am ：現代パイ・イ語 -am ：シャン語 -am.
60. 共通タイ語 aam ：百夷語 -aam ：現代パイ・イ語 -aam ：シャン語 -aam.

XX. 百夷語 A. uŋ「uŋ, oŋ」：漢語 uŋ ：百夷語 B, uŋ, oŋ

百夷文字 uŋ をもつて書かれる百夷語には，漢語 uŋ があてられる。ňuŋ 永「'iuŋ」〈蚊〉(196), ruŋ 隴「luŋ」〈虹〉(18), suŋ 送「suŋ」〈高い〉(646), khwau cuŋ 毫中「tʂuŋ」〈犀の角〉(613), thuŋ 痛「t'uŋ」〈袋〉(575), suŋ 送「suŋ」〈送る〉(259), nuŋ mai 濃埋「nuŋ」〈林〉(58).

この系列にも上記の數個の系列に並行して，一應 uŋ, uuŋ の對立を考えることができる。しかし，ここでは以下に掲げる現代パイ・イ語形，シャン語形，共通タイ語形との對應關係から，この對立を -uŋ および -oŋ に替えた方がより適切であると思われる。當時の漢語には -uŋ と -oŋ の對立はなかつたこともこの主張を支えるであろう。すなわち，〈蚊〉「ňuŋ」,〈虹〉「ruŋ」,〈高い〉「suŋ」に對して，〈犀〉「tʂoŋ」,〈袋〉「t'oŋ」,〈送る〉「soŋ」,〈林〉「noŋ」があつた。百夷語Bには，つぎの例がある。〈蚊〉永 (332)→「yuŋ」,〈高い〉送 (4)→「suŋ」,〈犀〉塚「tʂuŋ」

(286)→「tṣuŋ」,〈送る〉送 (458)→「soŋ」. 百夷語 uŋ は共通タイ語 uŋ に, 百夷語 oŋ は共通タイ語 oŋ に對應する。

〈蚊〉 T.C. ňuŋ L1 : 百 A. ňuŋ B. yuŋ : M.P. zuŋ 55 : Shan yuŋ 4
〈虹〉 T.C. ruŋ L3 : 百 A. ruŋ : M.P. huŋ 442: Shan hoŋ 4-(?)
〈高い〉 T.C. suŋ H1 : 百 suŋ : M.P. suŋ 35 : Shan suŋ 1
〈袋〉 T.C. thoŋ H1 : 百 t'oŋ : M.P. t'oŋ 35 : Shan t'oŋ 1
〈送る〉 T.C. soŋ H2 : 百 soŋ : M.P. soŋ 31 : Shan soŋ 2
〈林〉 T.C. ɒoŋ M1 : 百 noŋ : M.P. loŋ 33 : Shan loŋ 1

61. 共通タイ語 -uŋ →百夷語 -uŋ →現代パイ・イ語 -uŋ: シャン語 -uŋ.
62. 共通タイ語 -oŋ →百夷語 -oŋ →現代パイ・イ語 -oŋ: シャン語 -oŋ.

wuŋ 文「'un」〈軟かい〉(549) は, 上記のいずれとも並行していない。もし, 百夷語〈軟かい〉が形式「wuŋ」をもつていたならば, 漢語「'uŋ」(たとえば 翁) を用いて表記できたはずである。したがつて〈軟かい〉は「un」または「on」が正しい。これに對應する現代パイ・イ語「oon31」, シャン語「on 3」, 共通タイ語 won M2 の形式から, これには「on」を推定する。これはつぎのXXIに屬すべき單語である。

XXI. 百夷語 A. -un「un, on」 : 漢語 -un : 百夷語 B.「un, on」

百夷文字 -un をもつて書かれる單語には, 漢語 -un があてられる。 khun 混「xun」〈毛〉(404), khun 混〈官吏〉(364), mak mun 抹悶「mun」〈桃〉(123), 'un 問「'un」〈溫かい〉(84), phun 忿「fun」〈雨〉(4). 百夷語B.〈毛〉混 (337), 〈官吏〉混 (415),〈桃〉抹悶 (223),〈溫かい〉縕「'un」(20),〈雨〉忿 (36).

この系列に屬する單語には, 上記 -uŋ の系列と並行して, -un および -on を認める。すなわち,〈官吏〉,〈溫かい〉は -un であり,〈毛〉,〈桃〉,〈雨〉は -on であつたと考えられる。

〈毛〉 T.C. qhon H1 : 百 xon : M.P. xon 35 : Shan k'on 1
〈雨〉 T.C. fon H1 : 百 fon : M.P. fon 35 : Shan p'on 1
〈桃〉 T.C. -mwon L2 : 百 -mon : M.P. mon 33 : Shan -mon 2
〈官吏〉 T.C. qhun H1 : 百 xun : M.P. xun 35 : Shan k'un 1
〈溫かい〉 T.C. 'un L2 : 百 'un : M.P. un 33 : Shan un 2

63. 共通タイ語 -on →百夷語 -on →現代パイ・イ語 -on: シャン語 -on
64. 共通タイ語 -won →百夷語 -on →現代パイ・イ語 -on: シャン語 -on
65. 共通タイ語 -un →百夷語 -un →現代パイ・イ語 -un: シャン語 -un

XXII. 百夷語 A. -um「um, om」 : 漢語 un : 百夷語 B. -um, -om

百夷文字 -um をもつて書かれる單語には, 漢語 un または -uŋ があてられる。 lum 倫「lun」〈風〉(9), pum 本「pun」〈胃〉(430), mwak kum 莫工「kuŋ」〈霧〉(15), phum 噴「p'un」〈髮〉(405), khum 困「k'un」〈にがい〉(546). 百夷語Bには〈風〉倫 (30),〈頭髮〉噴 (503),〈にがい〉苦 (571) の例がある。この系列にも, 上記諸系列と並行して, -um および -om の對立した2種の形式が含まれていた。〈風〉,〈頭髮〉,〈にがい〉は -om,〈胃〉,〈霧〉は -um であつたことは

つぎの對應關係から推測される。

〈風〉	T.C. lom L1	: 百 lom	: M.P. lom 55	: Shan lom 4
〈頭髮〉	T.C. phrom H1	: 百 p'om	: M.P. p'om 35	: Shan p'om 1
〈にがい〉	T.C. khom H1	: 百 k'om	: M.P. xom 35	: Shan k'om 1
〈霧〉	T.C. klum M2	: 百 -kum	: M.P. ?	: Shan -kum 3
〈胃〉	T.C. pum M1	: 百 pum	: M.P. pum 33	: Shan pum 1

66. 共通タイ語 -om →百夷語 -om →現代パイ・イ語 -om : シャン語 -om

67. 共通タイ語 -um →百夷語 -um →現代パイ・イ語 -um : シャン語 -um

XXIII. 百夷語 A. üŋ「ɤŋ, ɯŋ」 : 漢語 əŋ, uŋ, iŋ : 百夷語 B. ɤŋ, ɯŋ (?)

百夷文字 üŋ を用いて書かれる單語には，漢語 əŋ, uŋ, iŋ があてられる。この例は少なく，ほとんどつぎの數語に限られている。1)tüŋ nam 登喃「təŋ」〈淵〉(50), lüŋ 稜「ləŋ」〈黃色〉(584), tüŋ 登〈淺い〉(662), 2) müŋ man 猛「muŋ」蠻〈地方〉(63), 3) man khrüŋ 蠻縈（パ 輕）「k'iŋ」〈羅〉(536) : 百夷語B.〈黃色〉稜 (610),〈地方〉猛蠻 (106).

現代パイ・イ語およびシャン語の體系から考察するならば，この中には ɯŋ および ɤŋ の2種の形式が含まれていることは容易に推定される。當時の漢語には k'əŋ (杭) と k'iŋ (輕) あるいは ləŋ (稜) と liŋ (伶) の對立があつたから，k'iŋ および ləŋ を用いていることには大きい意味がある。すなわち k'iŋ の方は狹母音であつたのに對して，ləŋ はより廣い母音であつた。唇音初頭音の場合には，形式 məŋ がなかつたために，この關係は muŋ と miŋ にかえられたものと思われる。上記 XII と並行して，前者には ɯŋ，後者には ɤŋ を與える。

〈地方〉	T.C. wïəŋ L1	: 百 mɤŋ	: M.P. mɤŋ 55	: shan möŋ 4
〈黃色い〉	T.C. hlïəŋ H1	: 百 lɤŋ	: M.P. lɤŋ 35	: shan löŋ 1
〈淵〉	T.C. tïŋ M1 ?	: 百 tɯŋ	: M.P. ?	: shan tüŋ 4
〈淺い〉	T.C. tïn M3	: 百 tɯŋ	: M.P. tɯn 31	: shan tün 3

68. 共通タイ語 -ïəŋ →百夷語 -ɤŋ →現代パイ・イ語 ɤŋ : シャン語 öŋ

69. 共通タイ語 -ïŋ, ïn (一部) →百夷語 ɯŋ →現代パイ・イ語 ɯn : シャン語 ün

XXIV. 百夷語 A. ün「ɤn, ɯn」 : 漢夷 ən, əŋ : 百夷語 B. ɤn, ɯn

百夷文字 ün をもつて書かれた單語には，漢語 ən, un および əŋ があてられる。ŋün 恩「'ən」〈銀〉(599), khün müw 恨莫「xən」〈回轉する〉(258), kaŋ khün 杠恨〈夜〉(82), khün 恨〈進む〉(233) : rün 倫〈家〉(451) : nün 楞「ləŋ」〈月〉(16). 百夷語B.〈銀〉恩 (583),〈回る〉狠「xən」(459),〈夜〉岡狠 (140),〈月〉稜「ləŋ」(22),〈家〉狠也 (341) の例がある。

漢語「ləŋ」をもつて表記された〈月〉は，それ以外の單語と末尾鼻音を異にした形式をもつていたわけではない。當時の漢語には音節形式「lən」はなかつたから「ləŋ」をあてたのである。しかし，この表記例の中には ɤn と ɯn の對立した形式が含まれていることも容易に推定される。〈銀〉,〈月〉,〈家〉は ɤn であり，〈回る〉,〈夜〉,〈進む〉は ɯn である。

〈銀〉 T.C. ŋïən L1 : 百 ŋɤn : M.P. ŋɤn 55 : Shan ŋün 4
〈月〉 T.C. Blïən～Dïən M1: 百 lɤn : M.P. lɤn 33 : Shan lön 1
〈家〉 T.C. rïən L1 : 百 A. rɤn B. hɤn: M.P. hɤn 55 : Shan hön 4
〈夜〉 T.C. Gïn L1 : 百 xɯn : M.P. xɯn 55 : Shan k'ün 4
〈進む〉 T.C. qhïn H3 : 百 xɯn : M.P. xɯn 31 : Shan k'ün 3

70. 共通タイ語 ïən →百夷語 -ɤn →現代パイ・イ語 -ɤn : シャン語 ön.

71. 共通タイ語 ïn →百夷語 -ɯn →現代パイ・イ語 -ɯn: シャン語 -ün.

XXV. 百夷語 A. iŋ「iŋ, eŋ, ien」 : 漢語 iŋ, in, ien : 百夷語 B. iŋ, eŋ

百夷文字 iŋ を用いて書かれる單語には，漢語 iŋ, in, ien, iun があてられる。1) khiŋ 悻「xiŋ」〈しようが〉(154), khiŋ 悻〈身體〉(398), tiŋ 定「tiŋ」〈瓜〉(153), tiŋ 定〈琴〉(474), piŋ 丙「piŋ」〈平らか〉(277), liŋ (ト lin) 領「liŋ」〈猿〉(212), riŋ 令「liŋ」〈干〉(629), hiŋ 悻〈乾く〉(97) など。百夷語Bには〈しようが〉慶「k'iŋ」(270),〈身體〉荇「xiŋ」(500),〈瓜〉丁「tiŋ」(271),〈平らか〉丙「piŋ」(78),〈猿〉領 (291),〈干〉幸稜「xiŋ」(634) の諸例がある。現代パイ・イ語，シャン語および共通タイ語形との對應關係にもとずいて，この中には，iŋ および eŋ の2種の形式が意義の區別をになつていたのであろうことは容易に推定される。當時の漢語には eŋ を適切に表記し得る形式はなかつた。〈しようが〉,〈身體〉,〈琴〉,〈猿〉は -iŋ であり，〈瓜〉,〈平らか〉,〈干〉,〈乾く〉は eŋ であつた。現代シャン語では，前者には -iŋ，後者には -ēŋ が對應し，共にシャン文字 -iŋ をもつて書かれる。

〈しようが〉 T.C. qhiŋ H1 : 百 A. xiŋ B. k'iŋ : M.P. xiŋ 35 : Shan k'iŋ 1
〈さる〉 T.C. liŋ L1 : 百 liŋ : M.P. liŋ 35 : Shan liŋ 4
〈琴〉 T.C. tiŋ M2 : 百 tiŋ : M.P. : Shan tiŋ 2
〈乾く〉 T.C. hɛɛŋ H3 : 百 heŋ : M.P. hieŋ 31: Shan heŋ 3
〈干〉 T.C. rɛɛŋ L1 : 百 A. reŋ B. heŋ : M.P. hieŋ 55 : Shan hēŋ 1
〈瓜〉 T.C. tɛɛŋ M1 : 百 teŋ : M.P. : Shan teŋ 1

72. 共通タイ語 iŋ →百夷語 iŋ →現代パイ・イ語 iŋ : シャン語 iŋ.

73. 共通タイ語 ɛɛŋ →百夷語 eŋ →現代パイ・イ語 ieŋ: シャン語 eŋ.

上記の一組に對して，khiŋ 欠「k'iɛn」〈硬い〉(550), caŋ khiŋ 章欠〈はかり〉(493), khiŋ 欠〈斤〉(631) の例がある。いずれも漢語「k'iɛn」をもつて表記されている。もし，これらの形式が「k'iŋ」であつたならば，漢語 k'iŋ たとえば'慶'を用いて表記することができた。しかし，ここで'欠'を採用していることは，この百夷語形式が k'ien または k'en であつたことを意味している。これには假りに「k'ien」を推定する。

〈硬い〉 共通タイ語 qhɛɛŋ H1 : 百 k'ien : M.P. xieŋ 35 : Shan k'eŋ 1
〈はかり〉 共通タイ語 qhɛɛŋ H2? : 百 k'ien : M.P. : Shan k'ēŋ 2

74. 共通タイ語 -ɛɛŋ : 百夷語 -ien : 現代パイ・イ語 ieŋ : シャン語 eŋ, ēŋ.

これと同じ系列に屬する單語として〈赤い〉,〈旱いた〉がある。

wiŋ 允「ˈiun」〈城市〉(30). 百夷語B. 〈城市〉允 (93) には並行例がない。この百夷語形式は不明確である。假りに，共通タイ語形 wiəŋ L1, シャン語 wēŋ 4, 蓮山パイ語 wiŋ 55 から，「ven」を推定しておきたい。

XXVI. 百夷語 A. in「in」 : 漢語 in, iŋ, ən : 百夷語 B. in

百夷語 A. im「im」: 漢語 in, iŋ, ən : 百夷語 B. im

百夷文字 in, im を用いて書かれる單語には，漢語 in, iŋ, ən があてられる。yin (ト iň) 印「ˈin」〈筋肉〉(431), laŋ yin (ト iň) 浪印〈腰〉(417), yin (ト yim) 印〈壽命〉(298), yin 印〈涼しい〉(85), phwa nin 法吝「lin」〈土塀〉(46); ŋin (ト nüŋ) 寧「niŋ」〈動く〉(308), ŋin 寧〈聽く〉(219), tin (パ tiŋ) 定「tiŋ」〈脚〉(424), tim (パ tiŋ) 定〈滿ちた〉(276), chin 枕「tsʻən」〈爭う〉(237), chim (パ chin) 枕〈鹽辛い〉(543), chin (ト chin) 枕〈鉛〉(609). 百夷語Bには〈土塀〉慶吝 (101),〈脚〉顚「tiɛn」(502),〈爭う〉整「tsəŋ」(480),〈鹽辛い〉謹「kin」(565),〈鉛〉枕 (590) の例がある。

當時の漢語には音節 nin (悠など) はあつたが，音節形式 tin, tsʻin はなかつた。したがつて，ここで tiŋ, tsʻən を用いるのは，百夷語 tin, tim, tsʻin, tsʻim を意圖していたと考えることができる。それと並行して，niŋ も實は ňin の表記を意圖したものと假定しておきたい。これらに該當する形が共通タイ語 en, em, in, im, 現代パイ・イ語 in, im, iim, シャン語 in, im, īm に對應する。

〈筋肉〉	T. C. ňen L1	: 百 yin	: M. P. jin 55	: Shan īn 1
〈滿ちた〉	T. C. tem M1	: 百 tim	: M. P. tiim 33	: Shan tim 1
〈鹽辛い〉	T. C. Gem L1	: 百 tsʻim	: M. P. tsiim 55	: Shan sīm 4
〈土〉	T. C. Din M1	: 百 nin	: M. P. lin 442	: Shan līn 1
〈動く〉	T. C. yin L1	: 百 ŋin	: M. P.	: Shan yin 4

〈腰〉yin (T. C. ? : M. P. ieŋ : Shan ēŋ) は百夷語 yeŋ であつたか yin であつたか決定することがむつかしい。同樣に〈たよる〉yin (ト iŋ) (329) (T. C. ?iŋ. Shan iŋ 1) も yiŋ または yin のいずれであつたかわからない。〈鉛〉chin は，その共通タイ語形 zīn L1, シャン語 sün 4 から，chün「tsʻɯn」の誤りであつたと考えられる。〈爭う〉chin も chüŋ が正しいのであろう。cf. 八百語 jɯ̄ŋ kan 整幹〈相爭〉(1010). T. C. ? その百夷語Bの形式「tsɯŋ」を參照されたい。〈針〉khiŋ 悻「xiŋ」,〈石〉riŋ 令「liŋ」はそれぞれ「xim」および「hin」であつたろう。cf. T. C. khem H1. M. P. xiim 35. Shan kʻīm 1〈針〉, T. C. hrin H1. M. P. hin 35. Shan hin 1〈石〉. cf. 百夷語B.〈石〉欣「hin」(83).

75. 共通タイ語 en →百夷語 in →現代パイ・イ語 in : シャン語 in.
76. 共通タイ語 em →百夷語 im →現代パイ・イ語 im : シャン語 im.
77. 共通タイ語 in →百夷語 in →現代パイ・イ語 in : シャン語 in.
78. 共通タイ語 im → ? ? ?

XXVII. 百夷語 A. waŋ「waŋ, waaŋ」: 漢語 uŋ, uaŋ, uan : 百夷語 B.「waŋ」

百夷文字 -waŋ をもつて書かれた單語には，漢語 1) uŋ, 2) uaŋ, 3) uan があ

てられる。1) twaŋ 董「tuŋ」〈銅〉(608), 〈腹〉(413), thwaŋ 桶「t'uŋ」〈捜す〉(253), pwaŋ khwau 崩「puŋ」毫〈賞與する〉(293), nwaŋ cai 濃「nuŋ」債〈弟〉(347). 2) cwaŋ pün 庄「tṣuaŋ」本〈旌旗〉(511), cwaŋ maa 庄麻〈鞭〉(520), kwaŋ 光「kuaŋ」〈鹿〉(215), 〈廣い〉(282), 〈大鼓〉(479), khrwaŋ 況「k'uaŋ」〈寺〉(449). 3) swaŋ 筭「suan」〈かがやく〉(20), nwaŋ 暖「nuan」〈池〉(53)。百夷語Bには〈銅〉董 (587), 〈腹〉董 (506), 〈弟〉癢「nuŋ」(424), 〈賞賜〉迸「puŋ」浩 (489), 〈池〉癢 (108), 〈鞭〉莊「tṣuaŋ」馬 (406), 〈鹿〉光 (311), 〈廣い〉(678), 〈大皷〉貢「kuŋ」(369) の例がある。

當時の漢語では tṣ-, tṣ'-, ṣ-, k-, k'-, x- 以外の初頭音と uaŋ が結合する音節は存在していなかつた。したがつて, 漢語 puŋ, nuŋ あるいは suan, nuan が, いずれも -waŋ の表記を意圖したものと考えることが許されるであろう。この系列は共通タイ語 ɔɔŋ または waŋ に對應する。この兩者の對立が現代パイ・イ語, シャン語においても保持されているために, 百夷語にも waŋ および waaŋ を推定する。

〈腹〉 T.C. dɔɔŋ L3 : 百 twaŋ : M.P. tuaŋ 442 : Shan tɔŋ 5
〈弟〉 T.C. nɔɔŋ L3 : 百 nwaŋ : M.P. luaŋ 442 : Shan nɔŋ 5
〈照らす〉 T.C. sɔɔŋ H2 : 百 swaŋ : M.P. suaŋ 11 : Shan sɔŋ 2
〈池〉 T.C. hnɔɔŋ H2 : 百 nwaŋ : M.P. : Shan nɔŋ 1
〈鹿〉 T.C. kwaaŋ M1 : 百 kwaaŋ : M.P. kaaŋ 33 : Shan kwāŋ 1
〈廣い〉 T.C. kwaaŋ M3 : 百 kwaaŋ : M.P. kaaŋ 31 : Shan kwāŋ 3

79. 共通タイ語 -ɔɔŋ →百夷語 -waŋ →現代パイ・イ語 -uaŋ: シャン語 -ɔŋ
80. 共通タイ語 -waaŋ →百夷語 -waaŋ →現代パイ・イ語 -aaŋ: シャン語 -wāŋ

XXVIII. 百夷語A. wan「wan, waan」: 漢語 uan, an: 百夷語B.「wan, waan」
百夷語A. wam「wam, waam」: 漢語 uan : 百夷語B.「wam, waam」

百夷文字 -wan および -wam を用いて書かれた單語には, 漢語 -uan または -an (唇音初頭音の場合) があてられいる。nwan (パ nwaŋ) 暖〈寢る〉(243), khwan 緩「xuan」〈煙〉(13), wan 萬「'uan」〈椀〉(481), mwan 慢「man」〈桑〉(164), mwan rɔ 慢戸〈枕〉(503); swam (パ swaŋ) 算「suan」〈酸い〉(529), swam 筭〈園〉(32), khwam (パ hwan) 緩〈香〉(542), mii khwam 米緩〈有事〉(262). 百夷語Bには, 〈酸い〉巡「siun」(566), 〈煙〉還「xuan」(42), 〈椀〉腕「'uan」(381), 〈桑〉敦慢 (260) の例がある。

これらに該當する百夷語形には, 上記 XXV と並行して, 共通タイ語, シャン語との對應關係から, wan, waan, wam, waam を推定する。

〈睡る〉 T.C. nɔɔn L1 : 百 nwan : M.P. luan 55 : Shan nɔn 4
〈酸い〉 T.C. som H3 : 百 swam : M.P. som 31 : Shan som 3
〈やせる〉 T.C. phrom H1<phrɔɔm ?
: 百 ywam : M.P. zuan 35 : Shan yɔm 1
〈園〉 T.C. swon H1 : 百 swan: M.P. suan 35 〈plain〉: Shan son 1
〈煙〉 T.C. Gwan L1 : 百 xwaan : M.P. ? : Shan k'waan 4

〈こと，言葉〉T. C. Gwaam L1：百 xwaam：M. P. xwaam 33：Shan k'waam 4

81. 共通タイ語 -on, -om（一部）→百夷語 wan, wam
→現代パイ・イ語 -wan, -om：シャン語 on, om.

82. 共通タイ語 ɔɔn →百夷語 wan →現代パイ・イ語 uan ：シャン語 ɔn.

83. 共通タイ語 wan, waam →百夷語 waan
→現代パイ・イ語 -?, -aam ：シャン語 waan, waam.

XXIX. 百夷語 A. yaň, iň「-ien」：漢語 iɛn ：百夷語 B.「-ien」

百夷文字 -yaň および -iň を用いて書かれた單語には，共に漢語 -iɛn があてられる。syaň 線「siɛn」〈寶石〉(600), kyaň 間「kiɛn」〈ほほ〉(402), taŋ pyaň 黨匾「piɛn」〈椅子〉(491), phrak pyaň 怕匾〈韮〉(159), niň 煉「liɛn」〈赤い〉(588), liň（ト ryam）璉「liɛn」〈境界〉(61), liň 璉「liɛn」〈旱いた〉(96), mwak niň 莫煉〈霞〉(14), liň pai 璉拜〈走る〉(205). 百夷語Bには，〈珊瑚〉線鳥 (594),〈椅子〉蕩邊「piɛn」(379),〈韮〉汎邊 (243),〈赤い〉煉 (611) の例がこれにあたる。

この百夷語形式は，綴字面では2種類にわかれているけれども，はつきり書き分けられているわけではなく，實際には共に「-ien」をあらわしたものと考えられる。またこの「-ien」が綴字 -iŋ をもつて書かれる例もあつた。(cf. XXIII)

この系列はつぎに示すごとく共通タイ語 ɛɛŋ, ɛɛn, ɛɛm に對應する。

〈寶石〉	T. C. sɛɛŋ H1	：百 sien	：M. P. sieŋ 35	：Shan seŋ 1
〈赤い〉	T. C. Dɛɛŋ M1	：百 lien	：M. P. lieŋ 33	：Shan leŋ 1
〈平たい〉	T. C. pɛɛn M2	：百 pien	：M. P.	：Shan pēŋ 4
〈走る〉	T. C. lɛɛn L2	：百 lien	：M. P. lien 33	：Shan len 3
〈ほほ〉	T. C. kɛɛm M3	：百 kien	：M. P. kiem 31	：Shan kim 3

84. 共通タイ語 ɛɛŋ, ɛɛn, ɛɛm →百夷語 -ien →現代パイ語 ieŋ, ien, iem
：シャン語 eŋ, en, im.

XXX. 百夷語A. ak, at, ap「ak, at, ap」：漢語 a ：百夷語B.「ak, at, ap」

一般に百夷文字 Vk, Vt, Vp をもつて書かれる百夷語は，漢字表記では母音のみが辨別されて末尾音はとくに區別されていない。たとえば tak（tak lo 答羅〈ばつた〉(201)）にも，tap（tap 答〈肝臓〉）にも共に 答「ta」があてられ，pak（〈百〉(624)）にも，pat（-nam 喃〈水昌〉(602)）にも共に'八'があてられる。これは，當時の漢語には -k, -t, -p の末尾閉鎖音が存在しなかつたことによるのである。百夷文字による綴字面にも，漢語からの影響によつて，末尾音の混同乃至は誤寫が屢々認められる。とくにパリ本には，この傾向が著しい。しかし，現代パイ・イ語，シャン語において，-k, -t, -p は相互にはつきり區別され，共通タイ語形に規則的に對應する形を保つているから百夷語にもこれらの末尾音をたてるべきである。百夷語Aには，mak 抹「ma」〈果物〉(162), phrak 怕「p'a」〈野菜〉(157), rak 刺「la」〈愛する〉(239), phrak 怕〈離れる〉(260), pat（パ pak）pit（パ pii）八必〈鴨をさく〉(526), lap 刺〈刀〉(500) の例があり，百夷語Bには〈果物〉

抹 (222), 〈百〉八稜 (633), 〈水昌〉八滿 (595) の例がある。

この系列にも，實際には，つぎの對應表から明らかなごとく，aŋ, aaŋ と並行して，ak, aak などの長母音と短母音の對立を想定しなければならない。

〈愛する〉	T.C. rak	: 百 A. rak	: M.P. hak	: Shan hak 5
〈肝臓〉	T.C. tap	: 百 tap	: M.P. tap	: Shan tap 5
〈刀〉	T.C. ɒaap	: 百 laap	: M.P. laap	: Shan laap 2
〈果物〉	T.C. hmaak	: 百 maak	: M.P. maak	: Shan maak 2
〈離れる〉	T.C. braak	: 百 p'aak	: M.P. p'aak	: Shan p'aak 3

85. 共通タイ語 ak, at, ap →百夷語 ak, at, ap
→現代パイ・イ語 ak, at, ap : シャン語 ak, at, ap

86. 共通タイ語 aak, aat, aap →百夷語 aak, aat, aap
→現代パイ・イ語 aak, aat, aap: シャン語 aak, aat, aap

XXXI. 百夷語 A. ik, it, ip : 漢語 i : 百夷語 B. ik, it, ip

百夷文字 ik, it, ip をもつて書かれる單語には，漢語 i または ɛ があてられる。1) lik 力「li」〈小さい〉(653), lik 力〈鐵〉(610), pit 必 (パ pii) 〈鴨〉(181), lip (パ lik) 力〈生の〉(300), phrit 辟〈辛い〉(545). 2) phaa mip 法滅〈かみなり〉(17). 百夷語Bにも，これと並行して，〈鐵〉立「li」(580), 〈鴨〉必「pi」(280), 〈小さい〉里「li」(675) の i に對して，〈かみなり〉法滅 (17) の iɛ がある。前者には，百夷語 iC を，後者には，ieC をたてる。これは共通タイ語 iC, eC および ɛɛC に對應する。

〈生の〉	T.C. ɒip	: 百 lip	: M.P. lip	: Shan lip 4
〈鐵〉	T.C. hlek	: 百 lik	: M.P. lik	: Shan lēk 4
〈鴨〉	T.C. pet	: 百 pit	: M.P. pit	: Shan pēt 4
〈爪〉	T.C. lep	: 百 lip-	: M.P. lip	: Shan nip 5
〈かみなり〉	T.C. mlɛɛp	: 百 -miep	: M.P. -miep	: Shan -mep 3

87. 共通タイ語 iC, eC →百夷語 iC →現代パイ・イ語 iC : シャン語 iC, ēC.

88. 共通タイ語 ɛɛC →百夷語 ieC →現代パイ・イ語 ieC: シャン語 eC.

XXXII. 百夷語 A. uk, ut, up : 漢語 u : 百夷語 B. uk, ut, up

百夷文字 uk, ut, up によつて書かれる百夷語には，漢語 u があてられる。suk 素「su」〈熱する〉(550), luk 六「lu」〈起る〉(245), mun mut 悶目「mu」〈塵〉(37), raa tuk 刺篤「tu」〈雪が降る〉(24), mut 目〈蟻〉(200), mak tup (パ tuk) 抹篤〈栗〉(126), sup (パ suk) 素〈口〉(407). 百夷語Bには，〈起きる〉魯馬「lu」(480), 〈曇る〉法木「mu」(5), 〈栗〉抹獨「tu」(226), 〈口〉速「su」(497) の例がある。この系列には，上記 -uŋ などの系列と並行して，-uC, -oC を推定することができる。〈熱する〉, 〈起きる〉, 〈塵〉は -uk, -ut であり，〈落ちる〉, 〈蟻〉, 〈栗〉, 〈口〉は -ok, -ot, -op であつた。共通タイ語 uC, oC に對應する。

〈塵〉	T.C. muk	: 百 -muk	: M.P. muk	: Shan muk 5
〈起きる〉	T.C. luk	: 百 luk	: M.P. luk	: Shan luk 5

〈蟻〉　T.C. mot　：百 mot　：M.P. mot　：Shan mot 5
〈落ちる〉 T.C. tok　：百 tok　：M.P. tok　：Shan tok 4
89. 共通タイ語 -uC →百夷語 -uC →現代パイ・イ語 -uC：シャン語 -uC
90. 共通タイ語 -oC →百夷語 -oC →現代パイ・イ語 -oC：シャン語 -oC

XXXIII. 百夷語 A. ük, üt, üp ：漢語 ɛ ：百夷語 B.「ɯk, ɣk」etc.

百夷文字 ük, üt, üp をもつて書かれた單語には，漢語 ɛ があてられる。lük 勒「lɛ」〈深い〉(663), lüt 勒〈血〉(434), lüt 勒〈熱〉(88), küp 革〈狹い〉(283). 百夷語Bには，〈熱〉勒 (144),〈深い〉勒 (60) の例がある。この系列には，上記 üŋ などに認められた表記分けがないために，いずれも ɣk を推定する。共通タイ語 ïk, ïək および ep に對應する。

〈血〉　T.C. lïət　：百 lɣt　：M.P. lɣt　：Shan löt 3
〈深い〉 T.C. lïk　：百 lɣk　：M.P. lɣk　：Shan lük 5
〈狹い〉 T.C. gep　：百 kɣp　：M.P. kip　：Shan kip 3
91. 共通タイ語 ïk →百夷語 ɣk →現代パイ・イ語 -ɣk：シャン語 ük
92. 共通タイ語 ïək →百夷語 ɣk →現代パイ・イ語 -ɣk：シャン語 ök

〈狹い〉百夷語 kɣp は，おそらく百夷文字の誤寫であつて，正しくは「kip」であつたと考えられる。

XXXIV. 百夷語 wak, wat：漢語 u, ɔ, uɔ, ɛ, uɛ：百夷語B「wok, wot」

百夷文字 wak, wat をもつて書かれる百夷語には，漢語 -u, -ɔ, -uɔ, -ɛ, -uɛ（ト ua）があてられる。swak 素「su」〈肘〉(42), pwat ト「pu」〈肺〉(429), 'wak 惡「'ɔ」〈出る〉(231), mwak 莫「mɔ」〈雲〉(2), mwak 莫（ト 抹「ma」）〈花〉(114 etc.), thwak 脫「t'uɔ」〈退く〉(234), rwat 勒「lɛ」（パ lüt）〈やり〉(508), lwat（パ lüt）勒〈短かい〉(287), ňwat 虐「niuɛ」〈木の芽〉(152). 百夷語Bには，〈雲〉莫（9），〈花〉莫 芽 (261),〈やり〉活「xuɔ」,〈短かい〉落「luɔ」の例がある。これらには，かりに -wok, -wot を推定する。これは共通タイ語 -ɔɔk, -ɔɔt に對應する。

〈雲〉　T.C. mɔɔk　：百 mwok　：M.P. muak　：Shan mɔk 2
〈出る〉 T.C. ɔɔk　：百 wok　：M.P. uak　：Shan ɔk 2
〈肺〉　T.C. pɔɔt　：百 pwot　：M.P. puat　：Shan pɔt 2
〈木の芽〉 T.C. ňɔɔt ：百 ňwot　：M.P. zuat　：Shan yɔt 3
93. 共通タイ語 ɔɔk, ɔɔt →百夷語 wak, wat
→現代パイ・イ語 uak, uat：シャン語 ɔk, ɔt

§**16.** 以上の手續の結果，百夷語 A, B の母音および末尾音の連續はつぎの體系になる。

V#: aa, ii, uu, o, ɯ, ɣ, ie,　Vi: ai, aai, uy(?) Vu: au, aaw, iw,
Vɯ: aɯ, wV: wa, wo, wei, wau wai,　iV: iəu
Vŋ: aŋ　aaŋ　　Vn: an　aan　　Vm: am　aam
　　uŋ　oŋ　　　un　on　　　um　om

	iŋ	eŋ		in	ien	im	em (?)
	ɯŋ	ɤŋ		ɯn	ɤn	ɯm	ɤm
	waŋ	waaŋ		wan	waan	wam	waam
Vk:	ak	aak	Vt:	at	aat	Vp: ap	aap
	uk	ok		ut	ot	up	op
	ik	ek		it	et	ip	iep
	ɤk			ɤt		ɤp(?)	
	wok			wot			

百夷語における漢語よりの借用語

§**17**. 百夷語は，AB ともに，タイ諸語一般に認められる事實と並行して，漢語よりの借用語をかなり豐富にもつていたものと考えられる。また，それらは，決して時を同じくして一度に借用された性質のものではなく，いろいろの時代にわたつて漸次借用されたものを含んでいたにちがいない。對象をこの『百夷館譯語』に限るとすれば，かりに借用語を 3 つのグループにわけて考察することができる。

§**18**. 第一には，もつとも新しい層がある。それらは，おそらく，この譯語を作成するにあたつて，とくに借用された單語であつたと思われる。たとえば，〈國〉を，百夷文字 kwe によつて書き，その發音を 國「kuɛ」をもつて表記しているグループがこの層に屬する。すなわち，意味をしめす漢語と，音表記に用いられる漢語が同一であり，百夷文字による書寫が，當時の漢語音に合致する事實は，この單語が借用されてからほどないことを意味している。このグループに屬すると考えられる借用語を，つぎに漢語の韻母を中心に對照して掲げる。

1. 漢語祝攝 -u: phuu〈府〉府「fu」(27)←Chin. 府「fu」より，mwak muu tan〈牡丹〉莫牡「mu」丹「tan」(101)←Chin. 牡丹より，tai tu〈京〉歹「tai」都「tu」(71)←Chin. 大都より，'an phuu〈安撫〉安撫「'an fu」(387)←Chin. 安撫より，syaň phu〈宣撫〉宣撫「siuɛn fu」(386)←Chin. 宣撫より，mai cu〈竹〉埋竹「tṣu」(121)←Chin. 竹より，

2. 漢語蟹攝 pai〈拜〉拜「pai」(289)←Chin. 拜より，tai tu←大都（上掲）

3. 漢語山攝 an. 牡丹（上掲），khyaň〈縣〉縣「xiɛn」(29)←Chin. 縣より，nuk yaň〈燕〉奴燕「'iɛn」(176)←Chin. 燕より，man kyaň〈絹〉蠻絹（パ見）「kiuɛn」←Chin. 絹より，〈宣撫〉（上掲）

4. 漢語流攝 iəu. cyaw〈州〉州「tṣiəu」(28)←Chin 州より，

5. 漢語拙攝 sye ŋün〈謝恩〉謝「siɛ」恩「'ən」(291)←Chin. 謝より，〈國〉（上掲）

6. 漢語臻攝 in, ən〈謝恩〉（上掲），syaŋ kuŋ〈進貢〉進「tsin」貢「kuŋ」(290)←Chin. 進より，wii cin〈玉簪〉玉「'y」簪「tsin」(104)←Chin. 簪より，

7. 漢語通攝 uŋ〈進貢〉（上掲）

8. 漢語止攝 i syaň wi〈宣慰〉宣慰「'ui」(385)←Chin. 慰より，〈玉簪〉（上

揭), chaŋ wi〈薔薇〉薔「ts'iaŋ」薇「'ui」(103)←Chin. 薇より,

9. 漢語果攝 ɔ, uɔ mwak chwat ywat〈芍藥〉莫芍「ʂuɔ」藥「'iɔ」(102) ←Chin. 芍藥より,

§19. 上記の借用語とはちがつて，それよりはより遡つた時代に借用され，漢語からの借用語であるという意識がうすらいでいたと思われる一群がある。woŋ te〈皇帝〉翁楪「'uŋ tiɛ」(330), siŋ te〈聖〉餳「siŋ」楪「tiɛ」(338) ←Chin. 聖子～聖帝より，chye yin〈舍人〉車印「tʂɛ 'in」(365)←Chin. 舍人より，thaw müŋ〈頭目〉陶「t'au」猛 (389) ←Chin. 頭より；pii〈筆〉必「pi」(476) ←Chin. 筆より，'wan〈椀〉萬「'uan」(481)←Chin. 椀より，man saa〈紗〉蠻沙 (565) ←Chin. 紗より，phu〈扶ける〉府「fu」(269)←Chin. 扶より。もし，これらの單語が上記の一連の借用語と同じ時に借用されたものであつたならば，漢語 皇帝「xuaŋ ti」を百夷文字 hwaŋ ti あるいは *khwaŋ ti をもつて書き，その音表記にも皇帝を與えていたであろう。〈筆〉以下は，漢語譯と表記漢字が合致しない故に，借用語としての意識がやや薄れていた言葉と見做して，このグループに入れた。これらは，一のグループと嚴格な區別はない。

§20. 第三にシャン系言語において，もつとも古い借用語層に屬するものに地支 (cyclic terms) がある[26]。これらの12種の動物名を配した時に關しての分類は，一連の單語を同時に將來した點では疑いをはさみ得ない。百夷語Bには，つぎの地支をあらわす形が記されている。

〈子〉招「tʂau」,〈丑〉包「pau」,〈寅〉以「'i」,〈卯〉毛「mau」,〈辰〉細「si」,〈己〉搔「sau」,〈午〉細阿「si 'a」,〈未〉母「mu」,〈申〉散「san」,〈酉〉好「xau」,〈戌〉蜜「mi」,〈亥〉藁「kau」.

この百夷語Bの形式は，Ahom 語，Lü 語，および八百語の形式とつぎの關係にある[27]。

	Ahom	Lü	八百語	百夷語B
〈子〉	cheu	tɕai³	cai 寨「tʂai」	招「tʂau」
〈丑〉	plāo	pau³	mau 枹「pau」	包「pau」
〈寅〉	ngi	ji²	ňii 以「'i」	以「'i」
〈卯〉	māo	mau³	mau 毛「mau」	毛「mau」
〈辰〉	shi	si¹	sii 習「si」	細「si」
〈己〉	sheu	sai³	sai 賽「sai」	搔「sau」
〈午〉	shi-ngā	sa-ŋa⁴	zɔ-ŋaa 瑣牙「sɔ-'a」	細阿「si'a」
〈未〉	mut	met⁶	mäd 滅「miɛ」	母「mu」

26) これに關しては，Fang-kuei Li 教授のよく知られた好論文がある。Some old Chinese loan words in the Tai Languages. Harvard Journal of Asiatic Studies. Vol. 8 pp. 333～342, 1944～45.

27) つぎの Ahom 語および Lü 語の形は，上掲李教授の論文から引用した。

〈申〉	shān	san[1]	san 三「san」	散「san」
〈酉〉	rāo	hrau[4]	rau 老「lau」	好「xau」
〈戌〉	mit	set	säd 謝「siɛ」	蜜「mi」
〈亥〉	keu	kai	gai 該「kai」	藥「kau」

この四者の關係を詳細に見ると，百夷語形式は Ahom 語に近く，八百語形式は Lü 語に近いことがわかる。この借用の對象となつた漢語の音形式は karlgren にしたがつてつぎのごとく推定する[28]。

	Arch. Chin.		Anc. Chin.		Arch. Chin.		Anc. Chin.
〈子〉	tsi̯əg	→	tsi	〈丑〉	t'ni̯ôg	→	t̂'i̯əu̯
〈寅〉	di̯ən	→	i̯ěn	〈卯〉	mlo̯g	→	mau
〈辰〉	i̯ôden	→	ź i̯ěn	〈己〉	zi̯əg	→	zi
〈午〉	ŋo	→	ŋuo	〈未〉	mi̯wəd	→	mjwei
〈申〉	śiěn	→	śi̯ěn	〈酉〉	zi̯ôg	→	i̯əu̯
〈戌〉	mug	→	məu̯	〈亥〉	g'əg	→	ɣâi

この漢語形式と百夷語形式の間には，初頭音について，つぎの對應關係を考えることができる。

1) 漢 ts->ts-：百 tṣ（八百 tṣ-）　2) 漢 t'n->t̂'：百 p-（八百 p-）
3) 漢 d->#-：百 #（八百 ň->#）　4) 漢 ml->m-, m->m-：百 m-（八百 m-）
5) 漢 d̂->ź-：百 s（八百 s-）　6) 漢 z->z-：百 s-（八百 s-）
7) 漢 ŋ->ŋ-：百 s-ŋ（八百 z-ŋ->s-ŋ-）　8) 漢 ś->ś-：百 s-（八百 s-）
9) 漢 z->#-：百 h<r-（八百 r-）　10) 漢 g'->γ-：百 k（八百 g-）

いわゆる韻母については，つぎの對應關係がある。

11) 漢 i̯əg>i　：百 au「aɯ」（八百 ai）〈子，己〉
12) 漢 i̯əg>âi　：百 au「aɯ」（八百 ai）（亥）
13) 漢 i̯ôg>i̯əu̯　：百 au「au」（八百 au）〈丑，酉〉
14) 漢 o̯g>au　：百 au「au」（八百 au）〈卯〉
15) 漢 i̯ən>i̯ěn　：百 i「i」（八百 i）〈寅，辰〉
16) 漢 i̯ěn>i̯ěn　：百 an「an」（八百 an）〈申〉
17) 漢 o>uo　：百 a「a」（八百 aa）〈午〉
18) 漢 i̯wəd>jwei　：百 u「ut」（八百 et）〈未〉
19) 漢 ug>əu̯　：百 i「it」（八百 et）〈戌〉

この對照關係から，百夷語（あるいは八百語）がこれらの一連の單語を，上古漢語から中古漢語へと變りつつある時期に借用したと斷定することは早計であると思う。何故ならば，我々は，百夷語（そして八百語乃至はタイ諸語一般に關して）の歷史をまつたく明らかにしていないからである。漢語自體が〈子〉tsi̯əg から tsi

28) B. Karlgren, Grammata Serica Recensa. Stockholm 1957 にしたがう。

に變つたのと同じく，百夷語においても，借用した當時の形式 tsi̯əg を，百夷語一般の變化と並行して，tsi̯əg>tsi̯aɯ>tsaɯ と變えたのかもわからない。また，上に記した漢語の形式よりもより古い段階を保存していると考えて差支えがない場合もある。午 si-ŋa<*zɔ-ŋa? がその例である。したがつて，我々は，さらに進んで，この借用語群をよりどころとして，百夷語の上古形式の一部を推定し得る可能性さえ見られる。タイ諸語の歴史は，12世紀より以前には遡ることができない。しかし，12世紀より以後の變化が漢語の變化と並行する點が少なくないために，もし，中古漢語との對應關係がはつきりするならば，漢語の歴史から類推して，タイ語の12世紀より以前の狀態をも推定することが不可能ではないと考えられる。借用語の問題も，その段階にいたつて，別の大きい意義をもつであろう。

（京都大學文學部助教授）

東洋文庫刊行物

東洋文庫論叢

No. 27 梅原末治著 蒙古ノイン・ウラ發見の遺物 昭和35年3月
B5 130頁 圖版 80葉

No. 40 和田 清編 明史食貨志譯註 昭和32年3月
（上） A5 701頁
（下） A5 529頁 2,500圓

No. 41 松本雅明著 詩經諸篇の成立に關する研究 昭和33年1月
A5 900頁 2,000圓

No. 42 和田 清著 東亞史研究（蒙古篇） 昭和34年3月
A5 972頁 2,100圓

No. 44 和田 清編 宋史食貨志譯註（一） 昭和35年3月
A5 1059頁 2,000圓

No. 45 多賀秋五郎著 宗譜の研究（資料篇） 昭和35年3月
B5 890頁 3,000圓

No. 46 榎 一雄著 エフタル勃興前後の中央アジア 昭和36年3月
A5 750頁

東洋文庫叢刊

No. 12 滿文老檔研究會譯註 滿文老檔 I～V 昭和30年8月～昭和36年3月
B5 5冊 各 2,400圓

No. 15 林春勝・林信篤 華夷變態 上・中・下
〔附〕長崎御用留所收唐船風說書 昭和33年3月—昭和35年3月
A5 3冊 各 3,000圓

No. 16 欽定西域同文志 上冊 昭和36年3月
A5 800頁 2,000圓